
IS 星海と共に

郭堯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 星海と共に

【Nコード】

N3098U

【作者名】

郭堯

【あらすじ】

ISの二次創作読んでたらムラムラきた暴走して出来上がったオリ主作品です。

ISが元々宇宙開発用なのにそこら辺やってる作品見ないな〜と妄想して作った作品です。

オリジナル展開が多くなりそうで、本編に絡むまで時間が掛かりそうです。

アルカディアで二重投稿しています。

第一話

漆黒の海を、彼女は泳いでいた。

漆黒の海は人に優しくない。人がこの青空の上にある海に辿り着くまで、一体どれだけの挑戦があり、どれだけの敗北があり、どれだけの涙があったか。

それでも先達たちは諦めず、宇宙という名の漆黒の海に一步を踏み出した。そして人は月に足跡を残すに至った。

だが、そこから先はどうだっただろうか？

先達たちは絶えず努力し、挑戦を続けたのかも知れない。それでも人類が宇宙に飛び出すには至らず。

彼女の祖父は挑戦者である。宇宙に夢を馳せた挑戦者だ。父は宇宙に踏み出した冒険者だった。ただ姉だけが違う道を歩んだが、それは自分のための選択であり、父祖たちと同じだけの尊敬と僅かな申し訳なさを抱いている。

そして今、彼女はこの漆黒の海にいる。母なる蒼き星が眼前にある。夢にまで見た景色がここにある。自らの力では光を映せぬ眼

に夢想した光景がここにある。

彼女は心を奪われていた。光を映すという機能を果たさない目の代わりに鋼の鎧がその輝く蒼を伝えていた。

だが、いつまでも心を奪われている訳にも行かない。彼女には役目があるのだから。証明しなければいけないことがあるのだから。

「ミランダ・ウルバーニ、予定通り、降下します」

通信機の向こうにいる仲間に、確認の言葉を伝える。

『了解、幸運を祈ります』

通信機越しに、誰かが唾を飲むのが聞こえた。いや、もしかすれば自分の音なのかも知れない。

鋼の鎧を纏った体が、彼女の意思に従い動き出す。母なる星に少しづつ、近付いていく。

彼女は証明したい。世界に知らしめたい。

世界は星の中だけでないと。果てしない海があるのだと。人々には旅立つ希望があるのだと。

「さあ、帰ろうか、バロール」

帰ろう、母なる星へ。帰って示そう、僕たちの価値を。

インフェニット・ストラトス、通称ISと呼ばれる物がある。
元は宇宙開発用に作られた一種のパワードスーツのようなものである。

世に出た当時、さして注目されることもなかったそれは、今では世界の中心だった。

世界のあらゆる兵器を超越し、当時の最新兵器を悉く過去の遺物へと変えてしまった。

今や国家の軍事力は保有しているISの数と質で決まる。世界はISの研究開発に躍起になった。その異常な戦闘力に魅せられて。

いつしか人々はIS以外の技術を疎かにするようになった。ISの技術さえ高ければ、国際社会で優位に立てるのだから、その方面に力が注がれる事自体は自然な事だろう。

そして兵器としてのIS研究により逼迫されているものに、その本来の目的である宇宙開発が含まれているというのは、どれほど

の皮肉なのだろうか。

そこは所謂管制室。

そこに幾人もの人間が、モニターを見つめていた。

彼らが想うのは、赤い髪の少女。

ミランダ・ウルバーニ。今、たった一人で宇宙からの帰還を果たそうとしている盲目の少女。

少女を含めた彼女にとってISとは複雑な存在だった。

それは人類の宇宙進出の為の希望である。そして同時に未曾有の試練でもあった。

ISほどの物があれば、人類の宇宙進出が何十年も前倒しされるだろう。ISの存在が認知された時、彼らの内多くはそう思い、狂喜した。

だが結果は今の零落振りである。ISがなければ、彼らは彼女と会うこともなかったのも確かだが。

ISは少女と彼らに小さな希望と大きな試練であった。

そして彼らは決意した。

世界がISにしか興味を示さないなら、ISで示してやろう。
世界に自分たちをアピールする。自分たちの存在に目を向けさせるのだ。

ISによる二十四時間以内で地球月面間の往復。名目上は月面探査だが、世に見せるべきは寧ろそちらにあった。

宇宙開発には莫大な資金が必要になる。そのスポンサーの決して少なくない部分が軍需産業である。彼らが宇宙開発に投資する理由は一つ。その技術が兵器に応用できるからだ。

ならば証明してやろう。自分たちの力を。

この日の為に最高の機材を作った。この日の為に万全の準備を整えた。この日の為に最高のISを仕上げて見せた。

自分たちの為してきた全ての最高を出し尽くした。

そしてその全ての最高は、ミランダという最高のアストロノーツに託された。

脱着式多段ブースターを用いての大気圏離脱から一気に月軌道までを移動し、月面を一周してIS故こそ、嘗てないほど詳細なデータを観測した。ただの研究目的ならこの時点で大成功と呼べるものだ。

だが今回に限ってはその先が求められた。

アポロ計画を始とする月面探査は移動だけでも数日を要するものだった。それを二十四時間を数える前に帰還して見せねばならない。

真空の世界に、休む場所などない。アストロノーツの少女に掛かる負担がどれほどのものか、彼らにも理解できていた。

それでも彼女は志願した。同じ夢を目指す者として。

だから彼女に託した。同じ夢を歩む者として。

やがて管制室から歓声が沸きあがる。管制室のモニターに映る夕日に、鋼の鎧を纏った彼女の姿が映ったのだ。

夕日に照らされ、降りてくるシルエットは、海亀に見えた。海を悠然と泳ぐが如くの姿は、この部屋にいる多くの者たちが待ち侘びた姿だった。

ISとしては珍しいフルスキンの装甲はオレンジと黒という自己主張の強い色合となっている。全体的に重装甲のアーマーは、彼女の体を二回りは大きく見せている。

形状としては最大の特徴、背中に背負った巨大な円盤、所謂レドームである。

頭部は各種センサー付きのバイザーを備えたフルフェイスマスク。バイザーの形状が亀の嘴に似ていなくもない。

綺麗な流線型を描く両肩の大型アーマーを始め、各部のアーマ

ーは美しい曲線を描いている。

脚部パーツは膝から下全て覆う形で、足首の間接は存在しない。そして滑らかな曲線を描きながら、膝に近付いていくほど太くなっていくという独特の形状をしている。両足に計四つの大型スラスターがあり、背中とレドームの間に展開されている大型スラスターと共に、その機動力を支える。

上空から写した飛行写真が、海を泳ぐ海亀に見えることから天文ファンから『海亀』と親しまれている宇宙探査用IS『バロール』が彼らの見える場所まで帰ってきたのである。

やがて海亀は指定されていた滑走路に、ふわりと降り立つ。その硬い両足が地面についた瞬間に、管制オペレーターの見ていたモニター上に表示されていた数字が止まる。

「バロール帰還を確認。所要時間……」

オペレーターの言葉のよく通る声に、管制室は静まり返る。

そうだ、自分たちにとっての本当の目的は単純に彼女の帰還じゃない。時間にこそ価値があるのだ。

「22時間38分17秒……です」

暫しの沈黙。誰もがその言葉を反芻し、その意味を確かめてい

た。

「いやつたああああ！」

誰かが叫んだ。一人が歓声を挙げれば、後は連鎖反応だった。瞬く間に歓声は広がり、部屋を覆い尽くした。

ミランダの気分は高揚していた。

シャワーで汗を流し、国際宇宙開発機構の指定ジャージに着替えていた。親しい局員に軽くメイクをしてもらい、頼りない軽く緩い足取りで通路に行く。

これから記者会見がある。宇宙開発史上、自分たちは大きなことを成し遂げたという自負がある。時代が違えば、今回の全過程が生中継されてもおかしくない出来事だと。

それでも、きつた明日のニュースや新聞じゃ僕たちのことで持ちきりになるんだ、と。心の底からそう思っている。

やがて喧騒に近付いているのが分かる。ミランダは一番近くの女子トイレに駆け込んだ。

そして鏡に映る自分の姿を見やる。

短く切り揃えられた鮮烈な赤髪、艶やかな質感を誇っている。髪質の硬さ故に前髪がやや跳ね気味だが、彼女に健康的な爽やかさを演出している。

唇には、局員の女性に塗ってもらった薄いルージュ。優しいその色は、ミランダも気に入っている。

自分の身嗜みを確認してよし、と声に出す。問題はない筈だ。自分は今回のプロジェクトの顔役である。微塵も粗相があつてはいけないのだ。

ふと湧いてきた緊張感を解き解す為か、意図せず小さな深呼吸をしていた。

「大丈夫、僕たちは遣り遂げたんだ。僕たちは認められていいんだ。そうだよ、バロール」

自分に言い聞かせるように呟く。視線の先には彼女の専用ISである『バロール』の待機状態であるペンダントが握られている。ペンダントからは彼女の言葉に応えるかのような熱を、ミランダは感じたように思えた。

もう一度深呼吸。

「さて、皆待ち侘びてるかな？もう、いかないかね」

前髪を掻き揚げて気合を入れる。

相も変わらずどこか危なっかしい足取りで出て行くミランダ。視力を持たない彼女の目の代わりを務める、顔の半分近くを覆う機械的なデザインのバイザー。他人の精神衛生の為に彼女の視線の方向を示す赤い光点が元氣よく輝いていた。

そして翌日のニュース番組の時間、プロジェクトの全メンバーがテレビに注視していた。この番組は今彼らが滞在している地域で最も大きなニュース番組である。

『……………なんと日本で、世界で始めてISを起動させた男性が現れました。男性の名は織斑一夏、……………』

放送の大部分は織斑一夏という少年の事で占められ、彼らの偉業は僅か一分ほどの報道で終わり、一部の天文ファンを喜ばせるだけに留まるのだった。

第二話

宇宙という空間。人の手の殆ど及ばぬその海にも、僅かながら人工物はある。その最も多い物は人工衛星である。

その機能は一部の例外を除いて観測である。天気予報などの公共の目的の物もあれば、監視や情報収集に特化した軍事目的の物もある。

これら宇宙で使われる機材は等しく同じ問題を抱えている。それは衛星軌道に到達したそれらに帰還能力がないため、メンテナンスが不可能なのである。

高い費用と技術を投入して、宇宙上げてみたら動きませんでしたが、ちよつとデブリと接触して壊れました、では余りに割に合わない。それでも地上から手出しなんぞ出来る訳ないので指を咥えているしかなかった。

「こちらミランダ・ウルバーニ、目標らしき衛星を目視。確認をお願いします」

だがISの登場でそれも解決可能な問題となった。ISの性能を持つてすれば、衛星軌道までの移動はそれほど費用を使わない。

ミランダは彼女の専用IS『バロール』を纏い、宇宙空間での衛星メンテナンスに赴いていた。

指定された座標に存在する人工衛星に接近するミランダ。地上からの管制により、それが目標の人工衛星であると確認される。そして彼女は指示に従い人工衛星に近付いていく。

「目標地点に到着、マルチアーム展開」

ミランダの言葉と共に、バロールの膨れ上がった両膝に変化が現れる。前にせり上がる形の膝、その先端部分が縦に割れる。そこから細長い、三つ指のロボットアームが現れる。

元々宇宙開発用に開発されたISだが、『バロール』は本当の意味でそのために作られている。そのため多くの作業用の装備を内蔵しているのである。

「準備完了、コントロールをどうぞ」

『こちら地上作業班、了解。アイハブコントロール』

「イエス、ユアハブコントロール」

地上との会話と共に、ロボットアームのコントロールを地上で待機していた作業班に任せる。ミランダは優秀なアストロノーツであるが、精密機械は畑違いなのだ。もともと一部分だけとはいえ、地上からISを遠隔操作して作業するなど前例のないことであり、地上の作業員たちも大いに緊張している。

ただ、この遠隔操作はシステムとISの間に装着者を挟まないと使えない代物である。一時は無人機の開発も可能なのでは、と軍需産業に注目され、複数の国や企業に販売された。販売されたのはどれもIS業界の有名企業などだったが、無人機を完成させたという情報はまだ存在しない。

尚、このシステムを作った人物は、何故これを医療や災害救助に活かそうとしないのか大いに嘆いたとか。

それはそれとして地上の作業員が自分の仕事を全うしやすいように、ミランダは自分と人工衛星の位置関係と相対速度を調整し続ける。1G環境を離れた今、一定距離内にデブリなどが近付いただけで、そちらの引力に影響されてしまうのだ。一応地球の重力影響下なので、決して大きな影響ではないのだが。

また、自分と人工衛星をもう一对のアームで固定する事も可能だが、その場合衛星の軌道に大きな影響を与えかねないし、何よりそちらのアームはパワーがありすぎて人工衛星のような耐久性の高くない物に接触することは好ましくなかった。

そんな地味な割には集中力と忍耐力を要する作業をこなしているミランダ。暫くして作業は終わり、ロボットアームで人工衛星を数回つついて、作業で発生した軌道の変化を修正する。

作業を終え一息吐く。後は降下ポイントまで移動し、降下コースに乗って帰還するだけだった。その筈だったのだが、移動中のミランダの、360度の視界にありえない物が飛び込んできた。

「え、ニンジン？宇宙にニンジン！？」

それは衛星軌道に浮かぶ巨大なニンジンだった。例え表面が金属製にしか見えなくとも、そのサイズが異常なまでの巨大さを誇っていたようにも、それを見た者はニンジンであると認識するだろう。見た目だけで判断するならば。

さらに信じがたい事に、『バロール』のセンサーは光学的なものを除いて、そのニンジンを認識できていない。宇宙空間を高速で飛翔するデブリなどに対応する為、世界で指折りの探査能力を誇る彼女の『バロール』が、である。

どうするべきか、ミランダは悩んだ。管制と連絡を取ろうにも通信が繋がらない。センサーで捉えられない事も含めて、ジャミングが何かされているのかも知れない。目の前のニンジンに。

結局ミランダはニンジンに接近してみる事にした。

宇宙空間では大気がないため距離感が狂うのだが、近付くにつれそれがちよつとした宇宙ステーション並みのデカブツであることに気付く。

「……一体何なんだろうね……これは」

思わず問いかけるように呟くミランダ。だが『バロール』にそれに応える術はない。

暫く移動を続けていると、やがてニンジンに変化が現れる。表面の装甲部分が数箇所開き、ミサイルランチャーのようなものがせり上がってくる。それをミサイルランチャーだと断言できなかったのはミサイルが収まるべき場所にこれまたニンジンが収まっているのが見えたからである。

「あゝ、最近働きづめだったから脳が幻覚を作ってハイパーセクターの映像に被せているのか。そうかそうか、そういうことだったのか。地上に降りたら休暇を申請しなくちゃ……」

現実逃避を始めたミランダの言葉が途切れる。巨大なニンジンから生えているニンジンランチャーから大量のニンジンが放たれたからである。

なんだこれは。何故ニンジンがミサイルの様な軌道を描きながら飛んでくるのか。宇宙人の侵略なのか？ならばあの巨大ニンジンを作ったのはウサギ星人なのか？ニンジン型兵器に乗って地球を征服し、全てのニンジンを奪い、地球の農業をニンジンで一本化するというのは？そしてウサギは年中発情期とかどこかで読んだから、兄さんが持ってたジャパニーズアダルトゲームみたいなことになってしまふのだろうか？

余りといえ余りにもな状況に、完全に錯乱状態に陥るミラン

ダ。それでも迫り来るニンジンを手く避けていく。その動きを第三者が見れば見事な回避機動と褒めていたことだろう。尤も鋼の海亀に、無数のニンジンが群がっていくという光景を前に、そこまでの正気を保てればという前提がつくが。

四方八方から迫るニンジンに、身を捻りながらギリギリの回避を強いられるミランダ。その動きは水中で戯れるイルカと例えても良さげなものだが、『バロール』のマスクの下には彼女の必死な表情がある。

やがて増えていく一方のニンジンに業を煮やしたミランダはニンジンの撃墜を試みる。両膝先端の装甲を展開、折り畳まれたままの作業用ロボットアームが露出する。そのアームの指の付け根部分が先端を展開、赤く細いレーザーが発せられる。

精密作業用のレーザーだが、出力を限界まで引き上げればそれなりの威力になる筈だとの判断だった。

そのまま体を捻り、幾つかのニンジンを薙ぎ払う。切り払われたニンジンはそのサイズにしては派手な爆発を起こし、周りのニンジンを巻き込んでいく。

「どれだけ爆薬詰めて、っち！」

その威力に驚きながらも、そんな隙も許さないと言わんばかり迫る無数のニンジン。見事な機動で何とか避けているが、『バロール』はIS業界屈指の重量級ISである。最高速は兎も角、加減速能力がよろしくない『バロール』ではニンジンを振り切れない。

いつそエンジンを無視して一目散に逃げ出すか？

『バロール』にはその重量に見合った装甲がある。宇宙空間での活動を前提とし、真空空間を飛び回るデブリや放射線、そしてシールドと併用すれば大気圏の摩擦熱にも耐えるほどの装甲が。ダメージを受けた状態での降下は未経験だが、やってやれないことはない筈だ。

「ちょっと痛い思いをしようと思うんだけど、どうだい？バロール」

思い立ったら、決断までは早かった。迷う余裕すらなかったという方が正しいのかも知れない。

ミランダの意思を受けて『バロール』のレドームユニットが唸る。エンジンとの位置関係、相対速度、予想軌道を素早く計算し、リアルタイムで最も安全なルートを算出する。

360度に展開される視界に現れた3Dルートデータに頬を緩める。

やっぱり僕らは最高だ、バロール。

ミランダは体を捻り、素早くルートを辿れる体勢を整える。両膝の装甲を閉じ、代わりの両肩のアーマーが展開し巨大な力二の鋏の形状になる。

ペンチアーム。高質量の物体を動かす為の、ハイパワーアームユニットである。

ペンチアームで顔面と体を守り、計六つあるスラスターを全開にする。ニンジンの直撃は無視。ミランダは『バロール』が示してくれるルートをなぞる事だけに全力を傾ける。ペンチアームが崩れていく。それも無視して突き進む。体が揺れ、軋む。『バロール』のダメージが、痛みとしてミランダに流れ込む。それでも止めない。

「頼むよ、バロール。僕はまだ君と星を見ていたいからさっ」

それにこんなニンジンで爆死とか冗談じゃない、という本音は隠しつつ。

そんな彼女の後方から迫る影があった。気付いたミランダは頬が引き攣るのを自覚した。さっきまで追ってきていたニンジンとは比べ物にならないほどの巨大ニンジンが迫ってきてるのである。全速移動中の『バロール』を軽く超える速度で。

「え？ いや、そんなのありなの！？」

迫る巨大ニンジン。慌てふためくミランダ。そして二つの影は重なる……

「そんな死に方認められない！」

叫び、跳ねるように起き上がったミランダ。暫く息を荒げていたが、やがて落ち着いてくると呟いた。

「またあの夢か」

彼女の言う『あの夢』、それは宇宙でニンジンに襲われるという、他人からすればコメディにしても三流が過ぎるものだった。

だが、それは半月前に実際に起きたことなのである。最後の巨大ニンジンの件以外は。

結局あの後、地上への降下は成功したのだが、ミランダは公海に落下、『バロール』も中破。自力の帰還は適わず、SOS信号で

救助される結果となった。

彼女が宇宙での人工衛星メンテナンスを行っていたのは、国際宇宙開発機構の運営資金の調達の為だった。各国の非軍事衛星のメンテナンスの委託を受ける事で、どうにか商売として成り立たせることは出来ないかと。

一応、非営利団体である国際宇宙開発機構だが、金がなくては研究は出来ない。苦肉の策として、宇宙ステーション関連作業のための機能で資金を作ろうとしたのである。

だが、作業そのものは成功したものの、謎のトラブルで危うくISとその装着者を失うところとなった。

この「未確認飛行人參事件（以後UFC事件と呼称）」は後にアメリカを含めた数力国に通達されたが、次の日には国連から緘口令が布かれるという事態になった。

この事態に納得のいかなかった国際宇宙開発機構だったが、それでもUFC事件を通達した各国も、この事件をなかったこととして取り扱った為どうすることも出来なかった。

最終的には各国から口止め料的に臨時の支援金を受け取って、UFC事件は闇に葬られる事となる。

なお、ミランダの墜落理由はISコアを狙ったテロに巻き込まれたという事に決定されたのである。

「嫌な汗かいたな、シャワー浴びなきゃ」

起き上がったミランダは『バロール』を部分展開、視覚を補うバイザーを実体化させる。その視界を頼りに汗を流しに向かう。

そう、彼女のバイザーは彼女のISの一部なのである。その為UFC事件から暫く、『バロール』を修理に出していた間は、慣れない杖を使つての生活に苦労もした。

シャワールームに入ったミランダはバイザーを消し、手探りでシャワーを操作する。手探りといってもいつも使っている施設なので不便はない。

流れ出る湯にうたれる肌は欧州人らしい白さを誇っている。同年代の男と比べてもやや背の高い骨格には、よく鍛えられた敏捷そうな筋肉が乗っている。それがやや筋肉質ながらも、健康的な美しさを醸し出す。

唯一胸のサイズが憤ましすぎることだけが、彼女にとっては不満だった。

やがて鳴り始めた目覚ましを止めると、彼女はジャージに着替えて部屋を後にした。

アストロノーツの朝はトレーニングから始まる。

ストレッチで体を解して施設の中庭をランニングする。そこには勿論ミランダ以外のアストロノーツも一緒である。その中でミランダはどこか危なっかしい歩調で走っていく。

その後幾つかのメニューをこなして、漸く朝食である。

朝食はトレーニングメニューを終えた者から各自摂ることになっているが、ミランダは他のメンバーと比べて遅めの朝食になる。

如何に優秀であろうと、ミランダはまだ子供である。努力を怠らない彼女だが、思春期の体はどうしても大人の成熟した肉体には付いていけなかった。

彼女のアストロノーツとしての評価は、適正AのIS装着者というパロメーターとは切り離せないものである。

そんな彼女が朝のトレーニングを終え、食堂で配膳してもらう。

「あ、ニンジンいらないよ」

ミランダ・ウルバーニ、ニンジンに対する苦手意識を植え付けられた十五歳の年だった。

第三話

ミランダは母に手を取ってもらいながらゆっくりと旅客機を降りる。いつも顔を覆っているバイザーはなく、大きなサングラスを掛けてある。

ミランダ・ウルバーニ。久しぶりの休暇で母国イタリアに帰郷した。

「おお、ミランダ、元気にしていたか？」

空港のゲートを出て、出迎えに来ていたミランダの父は、彼女と再会した喜びを抱擁という形で表した。

「久しぶり、父さん。こんな所まで、気を使わなくて良かったのに」

「そうよ、私もついてるんだから」

父の愛と喜びに少し苦しそうにしながらも、ミランダは笑顔を返した。それを横で見ている母も、やさしい笑顔を浮かべていた。

ミランダの両親は、というより姉を除いて皆宇宙関連の職に関わっている。

スペースシャトルの開発に携わっていたミランダの祖父の姿を見て育った父は、やがて優秀なアストロノーツとなり、祖父の関わったスペースシャトルで宇宙ステーションの組み立てに携わっていた。今では引退し、地元の天文博物館の館長として働いている。

ミランダの母もアストロノーツの候補生として若かりし頃の父と共に訓練に明け暮れていた。残念な事に宇宙に上がる事はついになかったが、それでも宇宙への情熱を捨てきれずに天文学を専攻し修士学位を取得、今では時折コメンテーターとしてテレビ出演する程である。

そんな天文一家に生まれたミランダが宇宙に憧れる様になるのは、極自然な事だったのかも知れない。

父親の運転する車で久方振りの実家に戻ったミランダ。長らく忘れていた実家の匂いに、懐かしい気分になる。

「それで、仕事の方はどうなんだ？」

リビングのソファで、母親に淹れてもらった紅茶を楽しんでいたミランダに、父親が問いかけた。彼自身は宇宙開発の第一線から身を引いているが、未だイタリア宇宙機関に身を置いているミランダの祖父を通じて、その窮状を知っていた。

「ん、悪くないよ。最近はおから仕事も入るようになったんだ。IS使って人工衛星のメンテナンスをするんだ。それに最近は大口の寄付があっただ」

そんな父親の質問の意図を察したミランダはそう答えた。

一応嘘ではない。外からの仕事で資金の足しにする計画があったのは確かだ。それがUFC事件のせいで凍結、一階の仕事で受けた報酬も『バロール』の修理でマイナスになった。

ただ幸いといっていいのか、UFC事件に関する口止め料がかなりの金額になり、機構の資金は大分潤った。

「そうか、今の時世、宇宙開発は色々辛いからな。無理する

もんじゃないぞ」

娘の話が言葉通りでないことに薄々感付きながらも、彼は敢えて追及しなかった。何か言った所で娘は宇宙から目を逸らす事はないだろう。それくらいのことは理解できていた。

「そう言えばミランダ、お前が帰ってくることをセレーナに伝えたら、あいつも休暇をとると言ってたよ」

「姉さんですか？」

ミランダの顔に明らかな喜びの感情が浮かんだ。

セレーナ・ウルバーニには幾つもの二つ名がある。

曰く『じゃじゃ馬』、『スピード狂』、『ミス・ノンブレイキ』などなど。その何れも親しみや尊敬を込めて呼ぶのである。

セレーナ・ウルバーニ、現イタリア軍IS部隊所属大尉。そしてISに於けるオリンピック、『モンド・グロツソ』元イタリア代表として二度連続出場を果たし、複数の『ヴァルキリー』称号を手

にした傑物である。

イタリア国内では国民的英雄扱いの彼女は、やはり久しぶりの実家の前に立っていた。

ミランダと同じ赤い髪はざんばらのショートに、どこか子猫を思わせる活発そうな顔立ち。女性としてはかなり高い、180cmを超える長身。もしミランダが順調に成長し、性格を落ち着き払ったものから変えれば彼女のようになるのではないか、と思わせる容姿である。その豊満な胸以外は。

「ただいま、愛しの我が家」

扉を開け、踊るような足取りで家にかかるセレーナ。それに一番に気付いたのは、キッチンで料理をしていた母親だった。

「あら、久しぶりね、お帰りなさい」

料理の手を止めて、出迎える母親。それに対しセレーナはオーバークション気味の動きで母親を抱きしめる。

「ただいま、ママ。元気だった？」

そして母親の頬に触れるようなキス。

「ええ、貴女も元気そうね。それよりリビングに行きなさい。
ミランダはもう着いてるわよ」

「ほんとに？じゃあいつてくるよ」

キッチンに戻っていく母親に手を振りながらリビングへ向かう。
そしてリビングで妹を視界に入れるとすぐさま駆け寄っていく。

「ミー、愛しのお姉ちゃんだよー！」

現状目が見えない為、動けない妹を抱き起こし、全力で頬ずりを敢行する姉。尚、ミランダは同世代の中では比較的背が高く、170近くあるのだが、それでも180を超える姉と一緒にするとそれほど高く見えなくなる。

「わ、あ、姉さん熱い、熱いよ」

驚異的な速度の頬ずりにより発生する、大気圏突入にも劣らぬ摩擦熱に溜まらずミランダの悲鳴が上がる。

「もー、ミーったら可愛いんだからー！」

それすらも聞こえないとばかりに続行される頼すり。

その横では存在に気付いてもらえないでいる父親がさめざめと涙を流していた。

その頃、カナダのブリティッシュコロンビア州に置かれている国際宇宙開発機構。その施設内の会議室で組織の運営に関する会合が行われていた。

「さて、前回のプロジェクト・クイックターンは一応の成功を収め、宇宙開発用のISの有用性は証明されたわけだ」

テーブルの上座に腰かけた、初老の男がまずは口を開いた。同じくテーブルに着いている者達はその言葉に注視している。

男が口にした『プロジェクト・クイックターン』。それは以前ミランダが行った二十四時間以内の地球月面間往復の事である。

「不幸な事に、世界初のISを起動できる男というニュースと時期が被った為、世間の目を集めスポンサーを集う事の方は失敗だったがね」

苦笑いをうけべ、冗談のように言う。だが、その言葉の影に、確かな疲労の色が見て取れた。

「ですが局長、バロールは間違いなく成功です。それにこのプロジェクトの成功により手に入れた月面の観測データは……」

「分かっているよ。だから言っただろう、一応の成功、だとね」

自虐的な冗談の心算だったが、声を荒げる部下に溜め息を吐きたい気分だった。

自分の要らない冗談が発端だが、この場にいる者達の余裕のなさが出て見えた。それもこれまでの状況を見れば仕方ないのかも知れないが。

「兎に角、バロールの登場で、宇宙空間での各種作業の効率の飛躍的な向上が見込まれているわけだな」

「はい、技術部の試算ですと現在主流のロボットアーム搭載型シャトルや、使い捨ての遠隔操作型ロボットと比べ、作業効率は二十倍以上が見込まれると」

局長と呼ばれた男の言葉に答えるように出てきた説明に一同が色めき立つ。なにせ長らくなかった、具体的な成果というものが提示されたのだから。

「さて、諸君に改めて言う必要もないだろうが、我々は極めて経済的な基盤の弱い組織である」

国際宇宙開発機構は複数の国が共同で設立した組織である。その運営資金は関連各国からの寄付から成り立つ。

そして小国にとってその理由に嘘はないが、運営資金の多くを捻出している大国にとってはまた裏の理由が発生する。それは他国の技術力の発展を監視、牽制する為である。そのために自国に独自の宇宙開発機関があるにも拘らず、わざわざ大金を出していたわけである。

だが、どの国も自国の宇宙開発事業にすら出資を減らしてISに取り組んでいる時世、そちらの意味での存在意義はもはや無くなったに等しい。今尚寄付が続いているのは、組織を立ち上げたからには投げ出せない、大国の面子と体面のためであり、その金額はもはや微々たるものである。

「現在、例の事件関連で多少潤った訳だが、それもあくまで一回っきりのもので、次はない」

一同は頷く。一時は国際的発言力にも大いに影響を与えていた

宇宙開発事業は、今や見向きもされていないのだから。

「では、以上のことを踏まえてもらった上で今回の本題に入らせてもらおう。諸君、プロジェクト・ジャーニーについてだ」

『プロジェクト・ジャーニー』。それは彼ら国際宇宙開発機構が、各国と連携して行われてきた火星の有人探査計画だった。

食料の自己生産プラントを内蔵した大型宇宙ステーションを建造し、それを宇宙船に見立てて数年がかりで火星へ向かい、現地で直接詳細な調査や実験を行う計画である。

1998年に建設が始まったISS（国際宇宙ステーション）などで培われたノウハウを活かし、決定された世界最大の宇宙開発プロジェクトとして、当時は世界中の注目を浴びていた。

現在建造は40%の状態であり、目玉の食糧生産プラントも日本で開発が進められている。だがISSが登場して以降、各国共に投入資金を大幅に削減、必要なパーツの製造が滞る始末だった。

「では、プロジェクト・ジャーニーについて、一之瀬博士にご説明願う」

局長の言葉が終わると共にテーブルの末席に座っていた人物が立ち上がる。

それは控えめに見ても特徴的な女性だった。

知らぬ者から見れば小学生に間違われるであろう、150に満たぬ身長。膝元まで届く漆の髪は顔の左半分を覆い隠し、露出している右半分からは不機嫌そうな三白眼が除いている。への字に結ばれた口からはロリポップが啜え煙草よろしく啜えられている。

黒い和服の上に仕事用の白衣を纏った、色んな意味で個性的な姿である。

一之瀬と呼ばれた彼女は上座の後方にある大型スクリーンの前に立つ。が、背が低すぎて後ろの人が良く見えない。それまで局長の側に立っていた秘書が、事前に用意していたのであろう立ち台を小柄な彼女の前に置く。

一之瀬と呼ばれた女性は嫌そうに表情を歪めたが、舌打ちをしてその上に立った。

「ご紹介に預かった一之瀬^{いちのせ} 菊李^{きくり}だ。プロジェクト・クイックターンの折からこちらの技術部の世話になっている」

今まで運営関連の場に出る機会のなかった女性は簡単な自己紹介を述べる。

「さて、プロジェクト・ジャーニーについて、この場で知らない方はいないだろうから省略させて頂く。結論から言わせて頂けば、このプロジェクトはもはや実現不可能だ」

然も当然といった口調から放たれた言葉に、局長と秘書の二人を除く一同は言われている事の意味が理解出来ずにいた。

既に十年以上の歳月を掛けここまで来た計画が不可能？プロジェクト・クイックターンを含めて、今までの全てはプロジェクト・ジャーニーを実現させる為のものではなかったのか？と。

そんな反応を予想していたのだらう、菊李はその理由を説明していく。

時間に、やはり資金である。

既に宇宙ステーション建設が始まって十年、資金面などの理由で建設は遅れている。元々計三十年での建設予定だったが、現在の財政状況では四十年以上掛かるという試算が出た。この場合、完成する前に古い部分から劣化が始まるだらうと。

当然劣化した場合は補修が必要になる。だが建設と補修を並行して行う財力などない上、補修が終わる頃には別の部分に問題が、という状況が繰り返されかねない。そうなれば後は泥沼である。延々と資金を呑み込み続け、結局一切の成果無しに、宇宙ステーションは自由落下によって地球に落ちて燃え尽きるだらうと。

もはや長期的に資金巡りを良くする方法を見つけない限り、『プロジェクト・ジャーニー』は完全に望みを絶たれているのである。

菊李の説明に会議室は静まり返った。

「さて、理解頂けたようで何より。ただ幸い例の事件で今現在の財政は悪くないと聞きましたか？」

そこで言葉を止め、菊李は局長に視線だけ向ける。それに気付いた局長はただ黙って頷いた。それを見て、菊李は口元を歪めた。

「今我々に残された道は二つある」

今絶望に打ちのめされているだろう一同に、菊李は宣言する。

「このまま惰性でこの場に留まり続けやがて腐り果てるか」

それはこの救いのない現状を言っているのだろう。ISが登場し、一つの希望を指し示されたあの日から。

「それとも破滅か栄光かの博打に出るか」

博打。つまりそれは打つべき一手を持っているということか。

「もし彼方がこのまま無様に歴史から消え果る事を善しとしないのであれば！私はプロジェクト・ジャーニーの中止と、その全

ての成果を接收し、新たに火星有人探査計画、プロジェクト・モビリティを提案させて頂く！」

『プロジェクト・モビリティ』。強行突破の名を冠せられたこの計画は、果たして彼らを星の海に誘うものとなるのか。今は誰にも分からない。

第四話

目覚めの気分は最高だった。腕の中の温もりが大好きだった。

「んふふ、ミーちゃんの匂い」

セレーナは軍人という単語の持つイメージから全力で逸脱するふにやふにやした笑みを浮かべ、未だ夢から覚めない妹を抱き寄せる。年の割りに大人びた造りの顔も、眠っていると可愛らしく見える。

セレーナがミランダを抱きしめて数分経ったところか、部屋に置いてある目覚まし時計が斧の責務を全うするべく、そのギミックを動かさんとする。だがそれよりも数瞬早くセレーナが目覚ましのスイッチを切る。漫画などだったらシュパンっと言った感じの擬音が出るであろっ速度で。

こうして目覚まし時計は己の責務を全うすることが出来ず、日頃の疲労が出たのか、昼近くまで眼を覚ますことはなかった。

この後、ミランダが「ああ！窓に！窓に！ニンジンが！」と叫んで眼を覚ましたそうだが、さしてどうでも良い事である。

菊李は自分のPCの前で、一つの図面を弄っていた。そこは彼女に与えられた私室である。

PCのモニターに映っている図面、それは『プロジェクト・モビリティ』の要になるISの設計図だった。

『バロール』同様宇宙開発用ISとして設計されているそのIS。その設計に細かい変更を加えているのである。

そもIS開発の主流は軍用か競技用である、というかほぼその二つしかない。よって皮肉にも程があるが、宇宙開発用ISはまったくノウハウが存在しないという状態にある。

そのため、『白騎士事件』以前を除くと宇宙開発機第一号となる『バロール』の稼動データを元に、色々と改良を加えているのである。当然改良の余地が有るのは『バロール』も同様である。装着者のミランダが休暇をとっている内に現在ラボの方ではバージョンアップが行われている。今回の改良は新型の装甲材であり、耐熱性の向上と若干の軽量化が実現されるだろう。

ふと時計に目を向けた。もうじき午後一時になる。すでに溶けてなくなっているロリポップの棒を捨て、白衣から新しいのを取り出して啜える。

「……昼食を摂り損ねたか」

菊李はふう、と溜め息を吐いてPCのデータをセーブする。そしてPCの電源を切ると部屋を出る。休暇中のミランダを除いたIS装着者チームを施設のブリーフィングルームに呼んでいるからだ。

「ん、一之瀬君か」

施設内の寄宿舎を出て、ブリーフィングルームのある実験棟へと向かう途中、意外な人物に声を掛けられた。

「む、局長、何故こんなところに？」

それはこの組織のの最高権力者だった。

「いや、しばらく現場に来れなかつたのでな。様子が気になったのだ」

「……偉い人の現場視察は正直邪魔にしかないので遠慮して頂きたいのですが」

嫌そうな感情を微塵も隠さない菊李の態度に、思わず苦笑いを浮かべる。齒に衣を着せぬ物言いは、万人に好かれるものではない

が、要らぬおべっか混じりの言葉を聞き飽きた局長からすればある種の爽快感を感じるものだった。

「そうかも知れんが、私も立場上な」

「ちつ、こっちの仕事ついでに案内するから着いてきて下さい。後、口出し厳禁で」

局長に背を向け、菊李は面倒くさそうに歩き出す。局長は黙ってその後ろについていくことにした。

ブリーフィングルームには二人の女性。国際宇宙開発機構に所属する、IS装着者候補たちである。

黒髪でアジア系の女性の名はエニア・ラウ。アメリカ籍華僑である。もう片方はエニアと比べるとやや大柄な印象を受けるブロードのロシア人女性、オクサナ・コズロフと言う。

「ふむ、時間には間に合ったかな」

一時五分前に扉を開けて入ってきた小さな姿、彼女たちを呼び出した張本人である一之瀬菊李である。

気付いた二人は立ち上がり、挨拶をしようとして、菊李の後ろに局長がいるのを見て驚く。

「あゝ、二人とも、私についてきた局長に挨拶する必要はない。無駄にするだけの時間は私にはないのでな。話があるなら今日の仕事を全て終えてからにしろ」

あまりと言えばあんまりな言葉に、二人は局長に目線を向ける。局長は構わないと、目線で告げる。それを無視して菊李は自分の話を続ける。

「二人とも、我が機構のIS装着者候補たる諸君らにはこれままで仕事らしい仕事は訓練くらいだった訳だが、それが何故だか分かるか？答えは諸君が三流だからだ。

私が専用機を預けたウルバーニを除きここにいるのは皆適正ランク前後の、IS装着者として二流にもなり得んと判断された人間だ」

唐突に始まった菊李の暴言に、焦ったのは局長だった。

確かにこの場にいる者たちはIS装着者として決して優秀とは言いがたい。真に優秀な者はより高待遇を約束できる国家や企業に所

属する。同じような業務内容なら、誰だって寄りよい条件の方が良いのだから。そして国際宇宙開発機構はそれらと比べると場末以外の何物でもなく、当然ここに集まった人材も謂わば余りものである。

とは言え機構からすれば苦勞して集めた人材である事に変わりはない。こんなことで辞められては堪らない。

「い、一之「口出し厳禁です」……あゝ、すまん」

三白眼の片目睨みで沈黙する局長。どうやらこの力関係は肩書きでは決まらないらしい。

「だがまあ、一流足り得んのは私も同様だ。今、一流とはISを作り出した篠ノ之束だけであり、後の人間はその遙か後ろをえつちらおつちら追いかけているのが現状だからな。

だが、天才の足元を掬うのは凡人と相場が決まっている。そこで凡人たる私はせめて諸君らが駄馬で終わらんように、目の前に人參を垂らしてやろうと思う。着いて来い」

言いたいことだけ言うと、とつとと部屋を出る菊李。

菊李の傍弱無人な振る舞いに戸惑う二人だが、彼女が自分たちの上司である事には変わりはない。どこか疲れた表情で手招きしてくる局長に負担を掛けるのも申し訳ないという思いもあり、黙って後ろに着いて行くことにした

一方菊李の横まで進んできた局長は腰を曲げて、彼女に耳打ちする。

「一之瀬君、あんなきつい言い方をする必要などあったのかね？君たちの内、どちらが欠けても致命的なんだがな、我々にとっては」

「事実です。我ら技術側の人間はISが世に出てこれだけの年月が経っているにも拘らず、篠ノ之束の影すら踏めずにいる。着いてきている二人に至っては謂わば余りもの。この程度の貶し文句、力にするくらいの反骨心がなければ使い物になどなりません。それならばいつそ切り捨てて次を探すべきです」

自分を含めて容赦のない批評を下す菊李に局長は溜め息を吐いた。

彼女の能力を二流と評するのは彼女だけだろう。彼女がここにいるのはその出自と、多分に政治的な理由が合わさった結果なのだ。

「まあ、彼女らにぴったりの人参は用意してあります。それよりプロジェクト・モビリティ、いつになったらゴーサイン出るのですか？」

「昨日の今日で出せるわけがないだろう。出資国との調整もある。それでも運営はフル稼働だよ」

二人の会話の通り、『プロジェクト・モビリティ』は未だ正式に動き出していない。

当然といえば当然である。基本参加国からの援助で成り立っている組織が、その参加国に何の断りもなく、「ちよっとプロジェクト勝手に変えました」という訳にはいかないのである。

その言葉を聞いて菊李は露骨に舌を打つ。機構の中では彼女の舌打ちは生態の一種であり、その音でその時の心境やら健康状態やらが分かるなどという噂が流れている。

「まあ、兎に角政治屋は政治屋の仕事を全うしてください。でなければこっちも自分たちの仕事に集中できませんので」

話はそれまでとばかりに言葉を切る。

やがて到着したのは施設内の複数あるファクトリーの一つである。この中では宇宙開発に必要な機材の研究や開発などが行われている。

その内菊李に任せられているのは比較的大きな建物である。開きっぱなしのシャッター口から入っていく。中は三つの区画に分けられ、それぞれ作業員たちが仕事に追われている。

一番手前のスペースには装着者無し状態で展開されている『バロール』が鎮座している。『バロール』は現在装甲の交換作業が行われており、新しくライトグリーンの装甲を装着した部分と、機会が露出した部分に分かれている。

菊李はその様子に目を向けると、またもや舌打ちを一つ。彼女はその作業の遅さに苛立っていた。IS関連の人材の不足は、現場ではより顕著だった。

「この機構に残っているのは誰にも相手にされない三流か、損得勘定の出来ない馬鹿か、はたまたISに関わりを持っていないかだ」というのは菊李の言である。

対して一番奥にはやたら大きく取られたスペースがあり、そこでは機械の設置作業が行われている。

そして、菊李の口にした『人参』とはその中央のスペースに存在していた。

「これが諸君が命を預ける事になるIS、宇宙開発用打鉄改、開発コード隕鉄だ」

『打鉄改』の名前の示す通り、それは純日本製量産機『打鉄』の改造機である。

量産機としては装甲に優れ、総合的な機体性能も良好。その打鉄を更に重装甲に仕立て、肌を完全に隠すフルスキンの装甲を追加。さらにただの装甲であった両肩の非固定浮遊部位には、『バロール』

の両膝に内蔵されているマルチアームの廉価版を内蔵し、戦闘能力の低下と引き換えに作業能力を向上させている。

装甲板も、今まで『バロール』が使っていた物のデータを元に選ばれた素材が使われている。『バロール』とは比べ物にはならないが、大気圏再突入に必要な装甲強度と耐熱性を確保している。

尤もデザイン上の違いなど、スペースシャトルカラー（つまりパンド）というカラーリングと、装甲形状が多少丸みを強めたことくらいである。

普通のIS装着者にとっては、余り魅力を感じる事のないだろう、作業用改造機。だが、それでも群れに混じる事のできなかつた駄馬として認識されてきた彼女らには、それは充分すぎるほどに『人参』だった。

尤も菊李は二人に目を向ける間も惜しみ、自分の部屋に戻り、図面の続きに取り掛かりに向かう。

さて、これからISを使った訓練も出来るようになる。訓練用設備もいつでも使えるようにさせておかなくてはならない。

「やれやれ、あのクソウサギ女の十分の一くらい、分けてもらいたいもんだ」

隕鉄に目を奪われている二人を置いて、菊李は工場を出る。「私じゃまだまだ仕事が遅いか」と呟きながら、次の仕事を片付けるために。

その後ろをゆっくりついて行く局長との姿を見た者はこう言った。

「まるで孫とおじいちゃんみたいだった」と。

「そう言えば兄さんが開発に参加した人工衛星、打ち上げていつだけ？」

「ああ、確か観測衛星だったけ？木星だか土星行きの」

その日の晩、この日も同じベットで寝ることになった姉妹は夜の歓談をしていた。話題はこの場にはない彼女達の兄についてである。

「うん、仕事があるから居合わせるのは無理だけど、やっぱり気になるから」

セレーナは後ろから妹を抱きすくめるようにして、ベットの中で談笑している。肩まで伸びる、いつもうなじで纏めてある赤髪を

手櫛で解いている。

「そつえばさ、また宇宙に出るのっていつ頃になるの？」

「そういうのは言えないよ、姉さん。けど、正直前の時に上手く話題が浚えなかったのは痛かったみたいだね。偉い人達が頭抱えてたから」

ちなみにセレーナの中では織斑一夏と言う名はいつか泣かすリストの最上段にいる。本人の全くもってあずかり知らないところであるが、こいつの存在が妹の晴れ舞台を邪魔したのは間違いない、というのがセレーナの認識である。

半ば八つ当たりなのは自覚しているが、それでも直接の面識のない男をボコる機会があれば躊躇はしないだろう。

「でもね、姉さん」

そんな姉の想いに気付かず、言葉を続けるミランダ。

「ん？」

「地球の外から見る世界って、綺麗なんだ」

後ろから抱きすくめているため、妹の表情は見えないが、セレナには手に取るように想像できた。きっと妹の表情はこの上なく輝いているだろう。

「そっか」

彼女はギュッと妹を抱きしめた。

第五話

多少の才能の有無なんて、努力でどうでもなるものと、ドラマやら映画やらで偶に出てくる台詞。

どうでもなるもんじゃねえよ、というのがエニア・ラウの経験談である。

彼女が纏っているIS、隕鉄。名目上は新型に分類できなくもないそれを纏い、プールでの訓練を行っていた。

本当の意味での無重力空間とはいかないが、その感覚を掴む為に昔から行われてきた訓練である。現在は流れるプール状態の中で人工衛星を模った機械に位置を合わせるといふ、メンテナンスの訓練だった。

それが今のエニアには結構な難易度を感じていた。早すぎず遅すぎず、そして距離も。全てを完璧にこなすには酷く集中力を使い、そしてそれが長時間続くのだ。

先ほどまで同じ訓練を行っていた、今日から訓練に復帰したミランダが軽い汗だけで済んでいたことからそれほどきついものとは

想像していなかった。

「一流ね、ああいうのが本当のっ」

四つも年下の子供にこうまでも差があるという現実が、彼女には腹立たしかった。

エニア・ラウはIS学園の卒業生である。IS適正は決して高いものでない。入学間もない頃の成績は、したから数えた方が早い順位だった。

その後は三年間、遮二無二に努力を続けた。その結果彼女の成績は確かに、少しずつではあるけど上がっていく。そして卒業する頃の成績、中の下辺りだった。

努力はした。だが現実とは即ち現実でしかない。努力は確実に身に付くのは事実であるが、それが支払った時間と等価の結果をもたらすかはまた別の話だった。

ISの操縦者というのはこの世の中、最も注目を浴びる職だといっていいただろう。その待遇も、下手な政治家や芸能人の比ではない。それだけIS操縦者は重要な人材なのだ。

だがISの心臓とも言うべきコアの総数は僅か四六七。一人一

機、というのは軍事的な意味で現実的でない。よって三人で一機というローテーションを組んだと仮定してその数は一四零一人。専用機という物の存在を考えれば、実際にはもっと少ない。

全世界にいる大凡三十億の女性に、梓は僅か千五百以下。その競争率は凄まじく、決して優秀とは言えなかった彼女には、軍も企業からも声が掛かる事はなかった。

この機構に就職できたのは、そんな狭い業界の中で、尚不人気な職場だったからである。

同じような内容で、同じような量の仕事なら、当然誰だって待遇が良い場所に行きたがる。そこを曲げて漸くISの正式な操縦者となる機会を得たのだ。エニアはこの機を逃したくなかった。

プールでの訓練を終え、隕鉄の脱着作業が行われている。

ISは基本的に量産機と専用機という枠組みで括られる。これが専用機なら量子化というプロセスを経て、瞬時に展開格納が可能だが、量産機にその機能はない。故に一々脱着作業が必要になる。

通常のISなら装甲が展開して、操縦者は出て終わりである。だが隕鉄の場合は更に、本来肌を露出させる部分を覆っている装甲を取り外す必要がある。緊急時用に装甲を一瞬で分解する機能もあるが、その後の再装着時の手間などを考えると、金銭的な理由も含め割に合わない。そのため、わざわざ人の手を借りながら、装甲を

手順に則り取り外していく。

やがて装甲は全て取り払われ、ISスーツに身を包んだソニアの全身が露わになる。

「どう？新しいISの調子は？」

「悪くないわ。学園で使ってた打鉄と似た感じ。そんなに違いはないわ」

スポーツドリンクを片手に、声を掛けてきたのはオクサナだった。エニアと同様、ISスーツ姿である。

二人とも同じデザインの物で、首元まで覆う、顔以外に肌を見せない作りになっている。これもうISのフルスキンと同様の目的のものであり、放射線や温度変化に対し操縦者の安全性を向上させるためのである。

「けどミッションは地獄よ？ウルバーニの様子から判断すると痛い目見るわ」

ドリンクを受け取りながら、自分の訓練での感想を伝える。

「だろうね。あんたとあの子じゃ汗の量が違うよ。まあ、覚悟

はしとくさ」

そういうと、早速オクサナは隕鉄の装着作業に入る。オクサナはエニアと比べると多少大柄だが、ある程度の体格差はISアーマーの方が適応してくれる。

「それにしても面倒な機体だね。一々人に着せてもらわなければいけないなんて」

「それは装着者の安全の為ですよ。これでも宇宙服より手間が掛からなさそうだって、一般の宇宙飛行士の人たちが言っていましたよ」

オクサナのぼやきに、装着を手伝っている作業員が返した。実際に隕鉄のことを興味本位で聞いたアストロノーツの反応である。確かに一般のISと比べれば手間だが、宇宙服という認識で考えれば時間の掛からない方である。

「そんじゃ頑張りなよ。私は汗流して休憩入るから」

「あいよ、ゆっくりしてきな」

疲労感の滲むエニアの笑みに対し、オクサナの返したそれは豪

快という言葉が似つかわしかった。

空中に現れる光円形。地上の機材から投影されているホログラフィである。その円で描かれたコースを、海亀のようなシルエツトが潜り、飛び回っている。

その影は『バロール』。オレンジと黒の相反しあう色合から、淡い緑と白に変わり、細部のデザインにも違いがあるが、その海亀のようなシルエツトはミランダ・ウルバーニの『バロール』に他ならなかった。

「タイムが四分遅れているわね。やはり感覚がおかしいかしら」

規定のコースを飛び終え、ミランダの訓練を担当しているトレーナーと通信越しのミーティングになる。普段は二人で行われるが、この日は『バロール』が調整を終えて始めての訓練であるため、技術者として菊李も参加していた。

「軽くなっている分重量バランスも変わっている。前と同じ感覚では動かせんだろう。が、それだけではないのだろう？」

「ええ、言葉では表現し辛いんですが、こう、バロールとの情

報のやり取りに違和感といえますか・・・」

装甲だけとは言え、バージョンアップを終えたばかりで、予期できない問題が発生している可能性もあるからだ。

最新技術を投入されて造られるた機体と言うのは基本的に、その高いカタログスペックと引き換えに、実際の運用データに基づく信頼性が皆無と言う欠点がある。戦闘機などのテストパイロットには、常にトップガンが選ばれるのはそのためである。万が一飛行中に機体に不具合が出ても、自己の生還と機体の回収の両立ということが可能であることが望ましいからだ。

そういう意味では専用機とは、完成した時点での信頼性は低い機体が多い。当然『バロール』もそういった信頼性の低い機体に含まれる。だから些細なデータも見逃せない。機体も操縦者も、これから動き出すプロジェクトの要として働いてもらうことになるから。

「それは恐らくコアが新しい装甲に慣れていないからだろうな」

ミランダの言葉から、菊李は問題の原因を推測していく。

ISコアは機会でありながら、ある意味生物的な特徴を持っている。それは自己進化ともいえるべき学習能力である。

人間同様経験する事で自己を変化させることが出来るのだ。

特に専用機の場合より操縦者に適応したり、中には気体に組み

込まれていない特殊機能に目覚める例すらある。

ただそこに問題もある。

人体に例えればISコアは基本的に脳と心臓に相当する。そしてISアーマーは体である。そして体の一部でも変化が出ると、ISコアは即座に対応できず、コントロールにノイズが混じる。

要は慣れないのである。人間にすれば、目が覚めたら腕が別人のものと換わってた、というレベルの変化に。

「こればかりは時間を掛けるしかないな。だが、君の方でフォロワーは効かなかったのか？いくらISが本調子でないとは言え、タイムを落とし過ぎに感じるんだがな」

菊李は結果に一定の理解を示しつつも、不機嫌さを隠さなかった。だが叱られる格好となったミランダはどこか嬉しさを隠せないといった声で応える。

盲目と言うハンデを持って生まれた彼女は、何かと家族に氣を使わせてきたという自覚がある。そういった過去にもよるのか、彼女は叱られるイコール期待されているという認識があり、期待されるということが何よりも嬉しいのだ。

『はい、もう少し訓練時間を増やしていただければ、早く慣れると思います』

「そういうのは私の専門外だな。クリス、可能な限り、実機訓練を増やしてもらえるか？勿論ミランダの体に必要以上の負担をかけん程度にな」

菊李の言葉に頷く女性トレーナー。意見交換が一段落し、次の指示が告げられる。

「それでは次の過程に入ります。ウルバーニさん、拡張領域からスターライトを展開してください」

『え、やっぱりやるんですか？』

先と違い、どこか不満なミランダの反応。それは次の過程が今回新しく追加したものであり、その内容に不満があった。

「どうした、さつさとしろ。自衛の手段くらい必要なのは前回のミッションで思い知っただろうが。今日の晩飯をお前だけ人参フルコースにされたいか」

『う、了解しました』

菊李に言われたからか、はたまたそれ程人参フルコースが嫌だ

ったのか。ミランダはISの基本的な機能の一つ、拡張領域に収納された物をコール、つまり呼び出す工程を開始する。

拡張領域とは、ISが初期から設定されている固定装備を除く、後付の装備を格納する機能である。

格納する物を、専用機の量子化と同じ工程で分解格納し、必要な時に展開するというものである。ISの機種によってその数は違うが、一部実験機などの例外を除き全ての機体がもつ機能と言える。

『展開、スターライトmk-?B』

十二ミリ口径レーザーライフル、『スターライトmk-?B』。新しく追加された装備であり、『バロール』に搭載された、初めての兵器である。

機構にとって出資国は同時に技術提供国でもある。その一国、イギリスから購入した量産品のレーザーライフルに手を加えたものである。

『バロール』の手の内に集まる粒子がやがて形を持ち、二メートル程の、スポーティなデザインの銃身を形作る。元々高速領域での取り回しを重視したのか、美しい流線型の装甲が、機関部を完全に覆い隠している。流線型を崩しているのはグリップと銃口の穴くらいである。

新しく追加されたメニュー。それは戦闘訓練だった。先のUFC事件以降、万が一に備え一定の自衛能力は必要ではないか、とい

う判断が下ったからである。当事者であるミランダは本業と関係ないことで訓練時間を潰したくないと考えているが、彼女一人の意思でどうにかなる類の問題ではなかった。

尤も、意外とこれに賛成を示したのが菊李である。

世間一般には伏せられているとは言え、四六七個あるコアの内、幾つかは盗難、もしくは強奪されている。機構の上層部の、その中の一部に限られるが行方不明のコアの存在は知っている。特にイギリスの第三世代試作機のBT兵器搭載型の二号機が、試験運用中に強奪されたという情報も過去にはあった。

当のイギリス政府が否定しているので真偽は不明だが、その情報が国家首脳間で広まり出したのと、イギリスのIS関連の施設や情報のセキュリティレベルが目に見えて上げられたのは同時期だった。そのため恐らく本当にあったのだらう、という認識が一般的になっている。

さらに言えば、第二回『モンド・グロツソ』ではアメリカから強奪されたISが裏で関わっていた、という情報も存在する。

兎にも角にも、もしISを奪おうという組織が現れ、且つその組織がミッション中にISを投入してくる可能性は否定できない。そのためにも、せめて自力で地表に逃げ、各国のIS部隊などの救助が到着するまで持ちこたえるだけの自衛能力が必要となったわけである。

ただ、情報の内容が内容だけに、ミランダを含めた現場の人間には伏せられている。それがミランダの不満に繋がっていた。

「まったく、クソウサギ女以外にも、頭が痛い」

「はい？何か？」

「何でもない。君が気にする事ではない」

無論苛立っているのは菊李も同様で、思わず悪態の一つも吐いてしまう。彼女の場合、『プロジェクト・モビリティ』のGOサインが未だに出ないことも一因だった。

「はあ、そうですか」

釈然としない顔のトレーナーを無視して、菊李はモニターに目を移す。内容はISを使った的当てゲームのようなものだ。戦闘訓練そのものが始めてのミランダでも、ISのFCSのサポートでそれなりに目標に当てている。尤も、初めて銃器に触るミランダが撃っている、という基準で考えればという前提条件があるが。

ふと、菊李の白衣のポケットから電子音の安っぽい音楽が響く。携帯電話の呼び出し音だった。

「もしもし、私だ。局長？ああ、もうそんな時間でしたか。分かりました、用意は出来ているのですぐに」

携帯をしまい、この日は退出する旨を伝える。

「今日はお早いですね」

「ああ、これから出張でな。後で連絡が行く筈だが、私がいな
い間の訓練内容はレポートに纏めておいてもらうぞ」

訓練などは畑違いだが、『バロール』のより詳細なデータを得
る為、その様子を直に観察することに菊李は少なくない時間を割い
ている。そんな彼女にしては随分早く席を外すのに、トレーナーの
女性は何となく尋ねたのだった。

それに対し、菊李は簡潔に答える。ある意味で未完成といえる
『バロール』の側を離れる事に些かの不安があったが、それでもや
る必要があることが幾つか存在した。

「どこに行くんですか？」

それを尋ねたトレーナーの女性に、これといった意図があった
わけではない。ただ、会話の流れで尋ねただけである。

「ん、久々に日本にな」

「明日への事で必死だというのに、もっと先のことにも気を回さなくてはいけないのだからな」と、彼女の言葉には、どこか自嘲めいた色が混ざっていた。

第六話

日が傾き始め、夕時と呼ばれる時間に挿しかかるのも、もうすぐという頃。国際宇宙開発機構のファクトリーの横で、二人の少女がチェスに興じていた。

「Aの四のポーンを、Aの五に」

片方はスポーツウェアに身を包んだ、長身の赤髪少女ミランダ。その相手をしているのは、若干汚れた作業着の少女だった。

女性にしてはかなり短めのショートカットの黒髪。おっとりした感じの目尻のたれた目。アジア人種では標準的な体格。

少女の名は長船^{ながふね}湊^{みなと}。機構のIS技術者の一人である。ある人物の言を借りると、三流と馬鹿しかいえないと言われる機構のIS関係者の中では、馬鹿に分類される人物である。

そんな彼女はミランダの指示通り、ミランダの駒を動かす。

今のミランダは、普段は目の代わりに部分展開している『バロール』を展開していない。そのため自分の駒に触れず、対戦相手の湊に動かしてもらっている。

チェスや将棋のパフォーマンスで、盤面を一切見ずに対局するというのがあるが、これはミランダにとって数少ない特技だった。

ミランダの幼少時代、姉のセレーナが盲目の妹でも楽しめるものと頑張った。そして能動的に行える娯楽が他に思いつかなかった結果、ミランダにこんな特技が備わるに至った。

「んじゃ私は……Dの四のナイトをBの五に、だよ」

湊は自分の駒の動きを口に出し、それを元にミランダは頭の中の基盤を動かしていく。

「んゝ、なら次はルークを……」

二人の対局は続いていく。

「何か今日はイラついてる？」

ふと、そう口にしたのは湊。

「ん？どうして」

「今日の棋譜、何時もより大分乱暴って言うか、ね」

ミランダと湊は歳が近いこともあり、オフの時間で一緒に過ごすことがよくあった。二人の対局も同様で、相手の心の状態を察せる程度にはお互いの指し方を理解していた。

「うん……そうかも知れないね」

対してミランダは少し考え事をする素振りを見せ、すぐに曖昧な笑みを浮かべた。

「やっぱり戦闘訓練？元々やるって話じゃなかったものね」

湊が先ず思い付いたのはそれだった。戦うことがミランダに合っているかは知らないが、少なくともそういう覚悟をする時間は貰えたとは思えなかった。

「どうなんだろう。モヤモヤしたのがあるのは自覚できるんだけどね。自分でもよく分からないんだ」

今日の訓練も、滞りなくこなした。何時もどおり、問題なく。

飛行訓練は上々、相変わらず不調はあるが、タイムは良くなっている。

相対速度、位置関係の合わせも順調だった。ある意味一番疲れる訓練がこれだったりするが、基準は充分満たしている。

戦闘訓練、殊、武器の扱いに関しては何とも言えない。比べるべき基準が、ミランダにはないからだ。いや、元イタリア代表の姉という比較対象が居る事には居るが、昨日今日始めて武器を手にしたミランダと比較するのは酷でしかない。まあ、周りからの反応から、悪い結果ではないのだろうとは察しているが。

全体として、問題なくやれている、筈なのだ。周りの誰もが褒めの言葉しか出ない程度には。

「ふ〜ん。まあ、私はIS乗る感覚はあんまり覚えてないから何とも言えないけど」

「そう言えばミナトはIS学園の出だったっけ？あっちのカリキュラムってやっぱり戦闘関連が中心なのかい？あ、Fの六のクインを……」

結局結論が出そうにない自問をしても仕方ないと、ミランダは話題を変えることにした。その間も二人の対局は続いていく。

「一年の内はね。二年から整備科とかにコース分かれるから。」

やっぱり攻めが何時もより早いのよ？何時もの堅さもないし。私は
六の……」

何時もはミランダがカチカチに守って、相手の息切れを待ち、
逆襲を狙う。けれどこの大局に於いては僅かに早いタイミングで攻
めに転じ、結局どちらも中途半端。逆にじわじわと湊に崩されてい
く。

「ま、私の場合中退ってことになるんだけどね。……考えてみ
ると最終学歴が中学卒業でよくここにいられるわね、私」

「それ言うと僕も中学卒業なんだけど」

十五歳のミランダと、十七歳の湊。どちらも世界的な公的機関
にいるような歳ではない。ISという物がこの世に現れるまでは。

ISという存在によって、夢を追う機会を手に入れた二人の対
局は進んでいく。他愛ない会話と共に。

「はい、チェック。」

「え？ああ、そうか。不味いね」

頭の反応が鈍い。チェックと言われて漸く今の戦況を理解した。

確かに脳内で描かれている盤上の駒、その配置はチェックが掛けられている。だがチェックメイトにはまだ遠い。戦況も不利ではあるが、クイーンもナイトも健在。巻き返しは十分に可能。なのだが……

「今日はここまでね」

「悪いね、付き合ってもらってるのに」

言つて、二人はチェスセットを片付け始める。どうにもミランダがこれ以上集中できそうにないと考えたからだ。

「そういう日もあるわよ。バロールも本調子じゃないし、一之瀬主任も居ないんだしちょっと息抜きの期間とでも考えればいいんじゃない？」

「いや、僕休み明けしてすぐだから、流石にそれはね」

港の提案に、つい苦笑いを返してしまう。気遣ってもらっているのは伝わってくるけど、そういうのは流石に不味いと思う。年齢やISの事もあって、自分たちは目立ち易いから、何か問題を起こすとすぐに人目につきそうだから。

ちなみに二人が片付けているチェスセットは、ミランダの誕生日に姉のセレーナがプレゼントした物である。そしてこの場の二人は知らないことだがこのチェスセット、実は二百ユーロ越えのアンティークだったりする。決して安いと言えない値段でも、妹の為ならポンと出せるその耽溺振りは、流石の両親も頭を痛めているらしい。

色々と調子の上がらない、三月末の午後だった。

ISが世に出てから現在にかけて、公的なIS関連教育機関はただ一つしか存在しない。

IS学園。設備土地など一切の費用は日本政府持ちだが、成果は世界で共有する、と言う真つ当な感覚持った者から言えば割とふざけた組織だ。

尤も第二次世界大戦以降、弱腰外交が最早腰砕けの領域に達していた日本としては良くやった方なのかも知れない。

建前上とは言え絶対中立である学園に上手く影響力を行使し、職員や生徒の日本人の割合を多くしている。その為IS関連の次世代を囑望されている人材の多くは日本人である。日本はこの、決して広くはないが多大な影響力を持つ業界でもメイド・イン・ジャパンのブランドイメージを浸透させつつあるのだった。

そんな内部事情はさて置き、この未来の世界情勢に大きな影響を与え得る学園の迎賓室のソファに一人の少女が座っていた。

いや、正確には少女のような女性、だった。

黒い和服の上に白衣、髪で半分隠れた容貌に、口に煙草よろしく啜えたロリポップ。国際宇宙開発機構、未だ動き出さぬ『プロジェクト・モビリティ』の総責任者、になる予定の女、一之瀬菊李である。

カナダから飛行機で日本へ。数時間のフライトを経て久しぶりの故郷となる。尤もこの帰郷はあくまで仕事であり、観光を楽しむ予定も余裕もないのだが。

日本に到着し、一日目の用を終え、二日目にこのIS学園に赴いた。そしてこの迎賓室に通され、今に至る。

手持ち無沙汰な菊李は出された緑茶の中に、啜えていたロリポップを突っ込む。やがて緑茶と呼ぶには些かおぞましい色に変色したそれを口に運ぶ。

「割といけるんだよな。見た目は酷いのに」

そんな事もあって十分ほど経った頃、迎賓室のドアがノックされ、今回会いに来た人物が現れる。

「お久しぶりです、一之瀬先生」

「ああ、こちらこそ、だ。織斑」

やや広がり気味な黒髪。凜とした容貌。女性物のスーツの下からも分かるメリハリのある体。

人類最強の女とも呼び声高い人物、『ブリュンヒルデ』織斑千冬その人だった。

「もう何年になるか、君とクソウサギ女が白騎士でやらかしてくれて以来か。面を向けて会うのは」

「……その節はご迷惑を」

苦い顔を浮かべる菊李に、若干申し訳なさそうに表情を歪める千冬。

「いや、君に言っても八つ当たりでしかないか。すまん。それより仕事の話しよう」

菊李は自分を落ち着かせるように、ソファに深く背を預ける。千冬は黙って向かいのソファに腰を下ろした。

「改めて、遠い所わざわざ御労足頂きまして」

改めて挨拶を交し合い、今回の用件に入る。

「詳しい話は事前に書類が贈られている筈だが、そこは大丈夫だな」

菊李がわざわざIS学園にやってきた理由、それは六月に学園で行われる予定の、新しいイベントに関してである。

元々は菊李の属する機構側から打診したもので、社会見学の要領で学園の生徒たちに講演会を開こうというものである。

当然、機構としての思惑は人材確保にある。ISに関しては、ギリギリ淘汰されなかったというレベルの人間が大部分を占めているのが機構の現状である。人材の宝庫とも言うべきIS学園ですべきことなど、他にある筈もない。

と言うのはスポンサーたる出資国に対するポーズの意味合いが強い。理由をつけて機構への出資を減らしたい各国にその口実を与えない為に、最大限の努力をアピールしなければいけない。隙を見せればすぐにこっそり投資を減らされてしまうのだ。

と言うのは機構の事情。無論大事なことであるのは事実だが、それなら菊李がここに来る必要はない。IS関連の人材なら兎も角、

機構に交渉事の専門家は不足していない。その中の誰一人技、術者たる菊李に劣る者はいない。

菊李がここに来たのは彼女が望んだからであり、自ら志願したからである。

「スケジュールはこんなところか。この方向で調整を、ということで構わないな？」

菊李の言葉に千冬は肯定を反す。誰が来ても問題はないだろう打ち合わせはこれで終わりとなる。ここから菊李の用事である。

「織斑、ここからは私人としての話になるのだがな」

菊李がわざわざ日本まで足を運び、千冬に合ったその理由。

「うちが本道に使うISを実用化させたことは知っているな？」

本道とは、本来の姿、中心にあるべき存在を言う。菊李はISの兵器としての在り方も、一つの形として認めている。だがISの本分は決して兵器ではないとも考えている。故に口にした本道という言葉。

嘗て戦場で多くの命を奪ったダイナマイトが、元々は人々が安

全に土木作業をする為の物だったように。嘗て戦場の空を支配した戦闘機の原型は、元々は空を飛ぶという人の夢を実現させるためだけに存在したように。

同様にISは戦うために創り出されたものではない。如何に兵器として有用でも、そうあることを願って創ったわけではないのだから。それが本道であってはいけないのだ。

そしてその意味をISを兵器にした人物の一人であるという自覚を持っている千冬は、菊李の言葉の意味を正しく理解していた。

「はい、月面への往復を達成したと伺いました」

千冬の立場からしてIS関連の情報はよく入る。特に『バロー』関連は機密でも何でもないのです、その気になれば誰だって手に入る情報である。

「そのうちのISがクソウサギ女の攻撃を受けてな」

その一言で千冬は全てを理解した。

「連絡が着いたらどうにかしてみようと思います」

これで宇宙での脅威、と言うか理不尽が減ることを、菊李は願

った。

これで話すこともなくなり、会談も終わりと流れになる。二人は部屋を出ると、千冬が菊李を校舎の外まで送ることになった。

そして別れの挨拶を交わし、菊李が背を向けた時だった。菊李は今思い出したといった感じで千冬に尋ねた。

「そう言えば織斑、話題のISに乗れる男と言うのは、アレは君の弟か？」

直接会った事はないが、千冬に弟が居るという事は、菊李も聞いていた。尤もニュースの情報に、話題の織斑一夏なる人物の縁類の情報は無い。だからこれは完全に菊李の勘である。

「そうですか、何か」

質問の意図を尋ねる千冬に、菊李は神妙な表情で答える。

「そうか。言われるまでもないだろうが、お前の弟は暫く台風の目だ。色々大変だろうが、支えてやれよ」

彼はただそこに存在するだけで周りに決して小さくない、それこそ何人もの人間の一生さへも左右するような存在となっている。

本人の意思に関わらず恨まれ、妬まれ、狙われるだろう。

そう思い、だが菊李は敢えてその言葉を口にしなかった。

千冬にとって、菊李の気遣いの言葉は意外だった。

「ご心配なく。うちの弟は強いので」

菊李の気遣いに、千冬は力強い声を返した。

第七話

日本に来て早一週間、周囲が入学シーズンで賑わう中、一之瀬菊李は久しぶりにご機嫌だった。

表情には出ていないが、彼女を覆う雰囲気は明らかに明るい。

倉持技研と言う企業がある。純日本製IS、『打鉄』の後継機『打鉄式式』の開発を行っている企業である。いや、行っていると言うのは多少語弊がある。開発は続いていることになっているが、事実上凍結。

何故か。世界唯一の男の専用機にスタッフを回したからだ。

正直に言えばそんな事は、菊李にとってはどうでもいい事だった。菊李個人にとって織斑一夏なる人物とは知人の弟であり、それだけである。彼が早速自分の知らないところで、他人の人生に影響力を行使していることはさて置き、『打鉄式式』の凍結の方である。

国際宇宙開発機構にて、菊李が手がけた二体目のIS『隕鉄』は『打鉄』をベースに手を加えた、再設計に近い域での改造機である。だが菊李にとっては不本意な事だが、『隕鉄』は当初予定していた性能に達していない。

倉持技研から『打鉄式式』のデータを提供してもらい、『隕鉄』

の装備に反映させる筈だったのだ。

日本が機構の出資国の一つである縁から倉持技研と技術交換が行われる契約が結ばれた。結局機構側も技研側も実際に技術交換が実現することはなかったが、契約を交わした事実に残り、それは履行されなかったのだ。

機構は損害賠償の請求に成功した。欧米基準のとんでもない額で。

万年金欠状態の機構にとっては案外こっちの方が良かったのかも知れないという感じの結果であった。そして技研に、日本政府に対しての口利きも約束させた。これで『プロジェクト・モビリティ』のスタートも早期化が期待できる。

正直代表候補生の専用機の凍結というのは企業の存続に関わりかねない事柄だと菊李は考えるが、日本政府から特に働きかけがない様子から、今回の『モンド・グロツソ』に間に合えばいいという考えなのかも知れない。平和ボケの日本人らしいと言えばその通りなのかも知れないが。

もし可能なら『打鉄式』の企画をこちらで受け持つことが出来れば面白いかも知れない。手間と時間を食うのは確かだが、日本政府から多額の支援金をせしめることが出来るだろうし、途中まで形になっている倉持技研の技術を盗めるのも美味しい。

そんな現実味のないことを考えるくらいに菊李は浮かっていた。それほどまでに美味しい金額だったということだ。

無論法律関係のことなので彼女一人でどうにかした訳ではない。

ちゃんと機構の弁護士を立てて、自身は代表でその場に居合わせただけのようなのだが。

その後倉持技研の本社ビルを後にした菊李は、弁護士と別れ、ホテルに戻る。

部屋に戻ると自分のノートパソコンを立ち上げる。そしてEメールをチェック、機構のIS操縦者たちに関するレポートを引き出す。

その情報に目を通していくに連れ、彼女の心中の浮かれた部分が冷めていく。

レポートに問題があった訳ではない。仕事は可能な限り冷静に当たる。それだけだ。

「やはり、もう何度か宇宙での実働データが欲しいか」

レポートに記されているデータは、万が一盗まれても被害を抑えられるよう、かなり大雑把な内容になっている。その為、菊李にも余り詳しい情報が入らない訳だが仕方がない。今の時世、ISのデータは値千金である。その為IS関連企業が互いに相手からハッキングを受けたと訴え合うという、コメディックな事もままある。そうまでして手に入れようとする人間がいるデータである。たかがノートパソコンで出来るセキュリティで守りきれぬ訳がないのである。故に菊李は本当に大事なデータは送ってこないように釘を刺していた。

尤もそのせいで設計改修中の新型ISのデータも持って来れず、手を加えられないのが不満ではあったが、こればかりはどうしようもない。

レポートに目を通し終えた菊李は、パソコンの電源を落とすと部屋の荷物を片付け始める。

彼女としては織斑千冬に接触した時点で目的を終えている。それでも日本に滞在していたのは、来日の理由を告げずに我儘を通した事への詫びの意味で、交渉に着いていただけである。

さあ、早く帰って仕事を再開させないといけないな。

菊李は一人ごちると、荷物を片付けていった。

機構のファクトリー、その一角に鎮座している『隕鉄』。その周囲を長船 湊を含めた何人ものスタッフが囲んでいる。『隕鉄』の装甲が外され、どんどん分解されていく。

『隕鉄』は現在大掛かりな点検作業が行われていた。

五月に、宇宙に出るミッションが決定したのである。『プロジエクト・ジャーニー』で、宇宙ステーションに接続することになっているモジュールが完成したのだ。

『プロジエクト・モビリティ』にGOサインが出ていないのと

同様、『プロジェクト・ジャーニー』も完全に止まった訳ではない。理由は勝手にプロジェクトを変えることが出来ないのと同じ。プロジェクトを勝手に止める訳のも、やっていいことではないのだ。非効率と言われればその通りかも知れないが、規模の大きい組織が秩序を保つ為にも規則は遵守されなければならない。そして参加国の政府に見せるという意味でも。

「七番ケーブル出して！それじゃない！挿し口が違っでしょ！」

「そこ手順それでよかったつけ？ああ！マニュアル汚れた手で触るな！読めなくなる！」

「その機材、フロアのだ真ん中に置いたの誰！台車が通れないじゃない！」

経験が浅く、未熟なスタッフの割合が高いせいか、怒号が止む事はない。

その様子を、作業の邪魔にならないようにファクトリーの壁際で見学しているのが二人。今人の輪の中心に鎮座する『隕鉄』の操縦者、エニア・ラウトとオクサナ・コスロフだった。

「バロールの時もそうだったけど、大した熱気よね」

「ま、頼もしい事じゃない？ 気の抜けた様子だったら、こつちも不安になるじゃん」

壁に寄りかかりながら呟くエニアに、オクサナは陽気に反す。

オクサナは作業の熱気をポジティブな方向に解釈しているようだが、曲がりなりにもIS学園を卒業したエニアにはそう考える事はできなかった。

遅い。そして乱雑。故に思い描いた通りに事が運ばず、怒号が上がる。

この場の熱気は、活気に基づくものではない。スタッフの苛立ちに基づくものなのである。唯一、上手く作業が回っているのは湊の周辺だけだった。

エニアと湊はお互い面識はないが、IS学園の先輩後輩の間柄である。エニアが三年の時に、湊は一年だった。

尤も湊は二年の六月半ばに退学手続きをして、その足で機構に赴いた為、機構に置いては湊の方が若干先輩だったりする。

エニアはIS学園の生徒だった。つまりIS学園の作業風景を知っている。もっと早かった。もっと秩序だった。もっと安心感があった。

まあ、こここのスタッフの殆どはISとは関係ない技術者から移って来た人間が大半だと言う。IS整備科を出た人間は、操縦者より職の選択の幅が広い。ISアーマー関連の技術は、その高価さに

目を瞑れば、民間でも応用できるものが少くないのだ。

そういう意味では機構にとって、IS装着者より手に入り辛い人材なのかも知れない。

兎にも角にも、IS学園での整備の様子を知っているだけに、この場の作業に溜め息を吐きたくなる。IS学園の卒業生が数名いるが、それだけじゃ足りていないのだ。

「そう言えば今度雑誌取材来るんだっけ？」

「ああ、うちのチームについて言うよりバロールとウルバーニについて所みたいけど」

大部分の専用機はその特性上、詳細な性能は国家機密になる。特に現在各国で試作されている第三世代機は特にその傾向が強い。量産機と違いカタログスペックさえ不明というのが一般的である。その為、具体的な技術を除き、ほぼ全てのスペック情報に情報規制が掛からない『バロール』はメディアには美味しい機体なのだろう、最近IS関連雑誌から取材の依頼が入ってきたのである。

無論これを断る理由は機構にはない。PRの機会は常に欲している。今回の依頼も二つ返事で決まっただけらしい。

尤もそれは自分たちとは関係のない話だと、二人は考えている。機構の広告塔はミランダである。

まず能力的にもエニアとオクサナでは、ミランダと比べ物にならない。加えて天文一家の生まれ、元イタリア代表の姉、そして先天性の盲目というハンデを背負った上での専用機の獲得、更にはイタリア代表候補の誘いを蹴ったの機構入り。

広告塔として、これ程適した人材もないだろう。実力としてもそうだが、ここまでの経歴がすでにちょっとしたドラマなのだから。

いや、彼女の場合、容姿も理由に入っているだろう。あれは将来日本で言う所のヅカ系っていうタイプに成長しそうだ、とソニアの思考はちよつと横にずれた。

「兎に角、私たちも頑張らないとなつ。次のミッション、どっちが宇宙に上げれるか、分かんないんだからさ」

オクサナの言葉に、そう言えばこつちの問題もあつたか、とエニアは溜め息を吐いた。

二人の装着者に一つのIS。ミッションに参加できるのは常にどちらかだけ。

軍のISのように複数の装着者でローテーションという必要はない。二十四時間体制の防衛体制が要求される軍と違い、宇宙開発で突発的なミッションというのは発生した例はない。つまり訓練などの成績如何では、ずっとミッションに参加できない可能性も出てくる。

それは不味い。機構のIS操縦者はミランダを含めて三人。正規の教育を受けたのはエニアだけ。

ミランダは姉の縁でISに触れ、オクサナはロシア連邦宇宙局で普通の宇宙飛行士候補として訓練を受けていたが職にあぶれて、と言う事情があつて。どちらも経験と言う面では大きくエニアに劣る。

機構のIS装着者の能力にランク付けするとすれば、上からミランダ、エニア、オクサナの順となる。だがエニアとオクサナの間に、経験差ほど成績に差はない。

オクサナの適正はB-。適性の差は大きくはないが、それとは別の才能に差があるのか、エニアとの成績差は少しずつ小さくなっている。このペースだと自分の優位は一年持たないかも知れない。何故自分だけこんなに伸びが悪いのか。

「まあ、負けないわよ、私。NASAが五月蠅いのよ、ロシアに負けるなつて。私NASAに世話になったことないのに」

「それ言ったら私もさ。連邦宇宙局の方も人のことクビにしないで急に、オクサナ同志よ、とか言ってきていてね」

国家の体面、名声、政治。唯でさえ自分の未来が悩ましいと言うのに、この上煩わしいものまでついて来る。無視できるものではない。五月蠅いものである事に変わりはない。

無論、NASAも連邦宇宙局も機構と同様の問題を抱えており、

それでもISを捨て別の道を歩もうと考えないのは、意地か情性か、エニアには分からなかった。ただ、それでも他の道に進む気にはなれなかった。

「なあ、オクサナ」

「ん？」

「負けないよ。理由は自分でも分からないけどさ、負けたくないんだ」

何となく口から出た言葉。口にしたエニアですらその意味を把握し切れていない。そんなエニアの呟くような一言に、オクサナは呆気にとられる。オクサナにとってISはあくまで仕事であり、勝ち負けということなど考えてもいなかったようだ。

その様子に、エニアは軽い苛立ちを覚えるが、それを表に出す事はしなかった。

「ライバル宣言、こういう時の日本の伝統みたいなもんだって」

エニアがIS学園で日本に住んでいた事は、オクサナも知って

いる。そしてオクサナは日本についてメディア上のイメージでしか知らない。だからその場にいた人間がそうだと言えば、そういうものかと納得する事にした。

「ん〜、えつと競争してお互い高めあうってことかな？」

「あ〜、大体そんな感じ」

またしてもポジティブに解釈したオクサナに、エニアは修正しなかった。漏れ出た本音ではあるが、そんな不用意な一言で今の友誼を壊すのは馬鹿らしすぎる。

「じゃ、私はそろそろ戻るわ。オクサナは？」

「私はもうちょっとここにいるよ。ここって大仕事の後酒が出ることあるからさ」

ここの作業班はこういった大仕事の後、班長の意向で酒が振舞われることがある。未成年も居る為ジューズになる物もいるが、大凡のスタッフには歓迎されている。ロシア人らしく酒好きなオクサナはそれに便乗する心算のようだ。

「はいはい、明日に響かない程度に抑えときなさいよ」

エニアはファクトリーを後にし、自分の部屋へと向かった。

「なんなんだろうな、才能ってさあ」

少なくとも自分にはないもの。それだけは断言できた。

「ウルバーニとかの十分の一でもいいから分けて欲しいな」

それは奇しくも少し前に、別の人物が口にした言葉に似ていた。

第七話（後書き）

これで他サイトでの貯金分はなくなりました。これから少しずつ書いていきます。

第八話

カナダに設置されている国際宇宙開発機構の本部、ISが配備されてから追加された設備が幾つある。

ISとは手の掛かる機械である。飛行機や船と同じように、使用、維持にそれ相応の設備が必要になるのである。ISの運用が決定してから、機構本部の敷地内では急ピッチで関連施設が作られていったのである。

専用のハンガーと併設されたファクトリー、各種訓練施設。そんな中、敷地内に足りない施設が一つある。実戦形式の戦闘訓練に耐えうる訓練施設である。

元々IS関連設備の導入決定が急な事であった為、当時必要ないと判断された施設が作られなかったのは当然の事だろう。ISの実戦型訓練には、その規格外の攻撃能力によって周囲が破壊されないようにバリアの発生機能が必要であり、それを新しく導入するにしても莫大な予算と時間が必要になる。

その時間も予算も充分でないため、機構はカナダ政府の施設をレンタルして使うことがある。

場所はカナダIS管理委員会の所轄する、訓練キャンプのアリナである。『モンド・グロツソ』が近づく時期になれば、国家代表候補が、その時点の代表を引き摺り下ろす為に猛特訓を行う場所である。今の時期は特に予定もなく、割と借り易いのだ。

そのアリーナ、ISのバリアと同様の技術で展開されているバリアフィールドの中で、二機のISが戦火を交えていた。

一機は『打鉄』に酷似し、されど曲線的になったフォルムのパンドカラーの機体、機構唯一の量産機『隕鉄』。

もう一機は薄い緑を基調にした、重厚を通り越して重鈍そうなフォルム、ミランダ・ウルバーニの専用機『バロール』である。

アリーナの空の間を駆ける二機。その間を奔る火線。

「やっぱり上手いんだね、エニア」

それをモニターで見ていたオクサナは感心した様子で心中を口にした。

「ですね。IS学園OGは伊達ではないようですね」

答えたのはトレーナーの、クリスことクリステイ・サーレン。引退したが、元アストロノーツであり、機構のIS装着者たちの訓練スケジュールは、彼女が軍などの戦闘中心のカリキュラムを参考に組んでいる。

アリーナでは尚二機の攻防が続いている。

『隕鉄』が手に持ったライフルをフルオートで撃ち続ける。放たれた銃弾の多くは『バロール』のシールドバリアに弾かれるが、一部の射角が深かったものが貫通していく。だがバリアで威力と速度を奪われた銃弾は、或いは紙一重で避けられ、或いは装甲表面にかすり傷を付けるだけで終わる。

対して『バロール』はレーザーライフル『スターライトmk-?B』の引き金を引く。尤も射撃訓練の経験等左程ないミランダである。対象に向かって撃つ、と言うよりは薙ぎ払う形で攻撃をする。

点ではなく線での攻撃。自身の能力を比較的正確に理解しているミランダなりの工夫であった。

だがそれでも、成績優秀ではなかったとは言え、相手はIS学園OGのエニア。虚実の駆け引きがない、タイミングが単調と、ミランダの素人同然の技量では殆ど命中しない。

「性能の上では完全にバロールが優勢、機体の制動もウルバーニさんですね。ただ、戦闘関連の経験だと、ブランクがあるとは言え圧倒的にラウさんですか」

クリスの発言を裏付けるように、モニターに記されている観測データでは、『バロール』の被弾率の方が圧倒的に高い。如何に機体の性能がよく、操縦者が資質に優れていようと、経験の差は簡単に崩せるものではないようだ。

「それにしても派手なもんだよね、ISの戦いつて。テレビで見てるより凄い感じだね」

一方オクサナは戦いの派手さに目がいつていた。確かにこの場にちゃんとしたISの教育を受けた人間がいれば、この戦いの、と言うよりこの二機のISの示しているパフォーマンスの高さに驚いていただろう。

もつともそれにはちゃんと理由がある。

ISはその殆どが競技用という事になっている。例えば建前に過ぎないといつても、守らなくてはいけないルールである。その為、競技用という名目で造られているISは、その公式大会用のレギュレーションに添ってリミッターが設定されている。当然と言えば当然。競技用と銘打った代物に、過剰な戦闘能力を持たせるわけにはいかないのだ（リミッターがついてても充分過剰戦力ではあるが）。故にテレビなどで放映されるような場面に、本当の意味で全開のISが晒される事はない。

だが逆に、競技用に造られていないISならそんなレギュレーションを守る必要はない。尤もその分使用に際しての手続きも煩雑なものになっているのだが。

兎にも角にも、今の二機は一般的のメディアで見ることの出来る性能を軽く超えている状態なのである。故に技術的に拙さのある二人の戦いも、それなりに見ごたえのあるものとなっていた。

エニアはライフルを乱射し、緩い弧を描きながらミランダに飛んで行く。

『おっし！おせええ！』

スピーカー越しに響くエニアの叫び。直線的な機動で『バロール』に突っ込む。ミランダの軌道に割り込むように接近しながら、左手に近接戦用ブレードを召喚する。

それに気付いたミランダはスターライトを縦に構える。そしてエニアのブレードの軌道を予測して盾にするように構える。同時にスターライトの下部装甲がスライド展開され、露出した部分に玉虫色のフィールドが展開される。

ミランダは上手くそのフィールドで相手の攻撃を受けようとするが、その効果を今までの模擬線で知っているエニアは大きく攻撃の軌道を変える。横振りの攻撃を、無理矢理振り上げる。そして空振りの勢いのままに脇腹へと蹴りを叩き込む。

『うくっ』

完全に防御を外された形になったミランダ。全く無防備で入った一撃に、如何な重装甲の『バロール』でもその衝撃は殺しきれるものではなかった。

『ペンチアーム！』

ミランダはエニアを捕まえようと、両肩の大型アームを展開する。本来イメージするだけでISの機能を発動させられることが理想なのだが、今のミランダにはまだ出来ない。それはあくまで戦闘に必要な技能であって、そんな技能を今までまともに習ったのはエニアだけなのだ。

だが、声でイメージを補助した起動では、相手に行動が漏れるだけでなく、声が終わるまでのタイムラグが存在する。伸ばされた鉄状のアームは余裕を持ってエニアのブレードに弾かれてしまう。

『つちい』

ミランダには珍しい、苛立った様子の舌打ち。

なんでこんなことしているんだ、という想い。元々ミランダは戦闘をする心算などなかった。地球の外を見て、それを皆に伝える。そして人が地球の外に出るのを助けるのがこの仕事の筈だ。戦うことを仕事にする心算があれば、わざわざ国家代表候補生を蹴ってここに来たりしなかった。

それでもこんな事をしているのは、自分は兎も角上の人間が必要だと判断したからだ。組織の一員という自覚はある。だから自分の全力も尽くしている。

だが、やはり苛立つ。

戦いという分野、実の所ミランダは全くの未経験者という訳で

はない。実際にイタリアの代表候補生のキャンプに数日参加している。

当時ISそのものに関して素人に毛が生えた程度だったミランダは、それでも周囲を驚かせる速度でISの技量を上げていった。

それでも最終的には今あるように宇宙開発を選んだ訳だが、それも純粹に宇宙開発への熱意だけではない。

イタリア国家代表候補であるだけで着いて回る、セレーナ・ウルバーニの名前。今まで自分一人では出歩く事さえ出来なかった盲目の少女に、経験したことのない戸惑いと恐怖を与えた。

ミランダに光を与えてくれたのはセレーナである。ミランダに翼を与えてくれたのはセレーナである。ミランダに力を与えてくれたのはセレーナである。

だからミランダは嫌だった。自分に多くを与えてくれた姉を、与えられた自分が嫌うなんてあつてはいけないことなのだから。

自分が今ここにいることに、それは確かに関係がある。そんな忘れたい事を無理矢理思い出させられ、ミランダは無自覚に激していた。

『ごんのっ！』

ミランダの、らしくない感情は、バイタルデータの形でクリスにも伝わっていた。だがミランダの事情など知らないクリスには、

それは単に戦闘行為に興奮しているのだと映った。第一、本当に危険な状態になるようだったら、その前にISの方から脳内分泌に干渉を受けて、事故につながる心配は殆どない。

未だ距離を外していないエニアに、ペンチアームのパンチが伸びる。両手より間合いの長いリーチで迫るが、それも相手に掠りもしない。

距離を開けることで攻撃を避けたエニアは、右手に持ったライフルを消し、次の瞬間にはバズー力を構えて見せていた。

『これならっ！』

『バロール』のぶ厚い装甲でも絶対防御に頼らざるを得まい。そう判断しての選択。

無論その選択は間違っていない。大気圏の摩擦熱に耐え得る重装甲に、リミッターなしのシールドバリアが加わっているのである。相応の威力を保った攻撃を通すのは容易ではない。

そういう意味で、『隕鉄』にとってバズー力は最も楽な選択肢と言える。無論、それを当てるには相応の腕が要求される。如何に『バロール』が遅いと言っても、それはISとして、である。本当の意味で遅いISなどこの世には存在しない。

威力はあるが、その初速の遅さ故に、対IS用に使われる事が稀なそれが放たれる。対してアームでの攻撃を避けられ、体勢を崩したままであるミランダはバーニアをフルスロットルで解放。無理

矢理にその場を離れようとする。

結果、直撃は避ける事には成功するが、至近距離で爆風に煽られ、シールドバリアを削られてしまう。それでも装甲に目立った損傷が見えないのは、機構のISの利用目的故だろう。シールドバリアなしで大気圏の摩擦にも耐え得る事を目指して造られた装甲である。

多くの機構を詰め込めるスペースシャトル等の機械と違い、ISのシールドバリアなしの大気圏突破は未だなされていない。それでも今『バロール』に使われている装甲が、世界最高峰の装甲材を使用していることには違いはない。

バズーカの爆風に逆らわず、流されるように相手と距離を稼ぐミランダ。そして地面に近い高度で再度レーザーライフルの閃光を薙ぎ払うように放つ。避けきれず、脚部を一薙ぎされるエニアだが、彼女はこの攻撃がそれほど威力のあるものではないことを知っている。多少のシールドエネルギーはくれてやると、再度ミランダへ向けて加速する。

『せりゃあああ！』

再び振るわれるエニアのブレード。だが今度はミランダがペンチアームで防ぐ。そして振られる、反対側のアーム。

当たる。

ミランダはそう感じた。だが手応えは予想した位置より内側か

ら感じた。ブレードの一撃を防がながらも、エニアは更に前に突き進んでいたのである。アームの根元に近い位置による、遠心力の乗り切らない一撃はエニアの動きを阻害する事すら出来なかった。

そして伸ばされるエニアの右手。そしてその手に現れたライフルの銃口が『バロール』の顔を捉えた。

予定されていた訓練を終え、手配されたバスで機構の本部まで移動するスタッフ。『隕鉄』に関連するスタッフのみ別途トラック移動として乗り合わせていない。

バスの後ろの席ではウルバーニが眠っている。

「疲れてるねえ」

「まあ、一人だけ訓練の量が違った訳だし」

機構のISは二機。その内『バロール』がウルバーニにしか使えない以上、残りの二人で『隕鉄』を共有している。そして対戦形式の訓練になると、必ずウルバーニが参戦することになる。結果彼女だけやたらと疲労を蓄積することになったのである。

「それにしてもエニアがあんなに強かったってのは予想外だったよ。IS学園卒業生は伊達じゃないって？」

オクサナは素直な感想としてエニアを褒めちぎっていた。ISの性能と操縦者の適正、実際の所は兎も角、素人には割りと絶対的な差に見える。さらには実際に戦ってその差を実感したオクサナは、素直にエニアを凄いものだと感じていた。

「そりゃこれでもちゃんと訓練受けてた身よ。そう簡単に素人に負けるようじゃ面目が立たないわ」

疲れた様子で答えるエニア。最後尾の席で寝ているミランダを視界に収めながら。

事実として、エニアがミランダに勝るものは戦いの駆け引きだけである。

本来必要でなかった筈の技能。それがどういった経緯で訓練項目に追加されたのかはエニアたちは知らない。その為エニアは戦闘訓練の必要性を認識できずにおり、本心から優位を感じることができずにいた。

「それに後半行くほどハンデが付いて来た訳だし」

エニアが言っているのは訓練の量の違いである。

ただでさえ充分に体が出来上がっていないミランダである。それが他の二人の倍の訓練量なのだ。休憩時間も二人のほぼ半分以上なので、ほとんど動きが悪くなっていた。訓練そのものはそれなりに充実していたが、後味の悪さは消しようがない。

ただ、それとは別にミランダとの戦いは、質の違う気持ち悪さを感じさせるものだった。動きが早い訳でも、うまい訳でもない。なのに溜まっていく苛立ち。その挙動から伝わってくる違和感は自分でも何故だと思うようなミスを誘発させる。

「まあまあ、別にそれが理由で勝ってたわけじゃないんだし。気にする必要はないと思うんだけどな」

どうにも思考がネガティブに行きやすいエニアに、苦笑いする。オクサナにとって、この年下の二人は『凄い人たち』なのだ。素直に尊敬するし、素直に賞賛する。ある意味エニアとは対極に位置する人物なのだろう、オクサナという人物は。

「それよりさ、寮に着いたら一杯やろうよ。実家からいいウオツカと脂身の塩漬けが届いたんだ」

「いや、私まだ未成年なんだけど」

噛み合っているのか、噛み合っていないのか。凡人二人は今日もつるんでいる。

第八話（後書き）

後書き

天気予報に寄れば暑さが一段落してきたらしい今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

相変わらず主人公である筈のミランダが目立ちません。ちょっと前は菊季、最近はエニアが前面に出てきている感じですね。一応次回からやる予定の話ではミランダが主人公らしく出番も増える予定です。

そんな訳で初の戦闘シーン、結構難産でした。その割にはクオリティに疑問符の出る出来でしたが。兎に角本編とも、次回かその次辺りから絡むところまで行けそうです。楽しみにしていただければ、と。

それでは今回はこの辺で、また次回お会いしましょう。

第九話

アメリカ合衆国がフロリダ州、ケネディ宇宙センター。アメリカ航空宇宙局、俗に言う所のNASAの所有する有人宇宙船発射場及び打ち上げ管制施設である。

ケープカナベラル空軍基地併設され、主に有人ロケットの打ち上げを中心に担当するこの施設はこの日、騒がしく動いていた。

発射場には聳え立つ二本の円筒状の物体が複数組み合わせられたものが見える。見る者が見れば、それがスペースシャトルの打ち上げに使われるロケットに似ていると気付くだろう。だがそのサイズは酷く小さく、とてもシャトルを宇宙に運べるようには見えない。

「それにしてもIS使って宇宙に行くってさ、酔狂な使い方だよな。どこもコアが余っている訳じゃないのに」

口にしたのはアメリカ空軍に所属するIS部隊のメンバー、ミナ・アダムス。腰まで届く金髪が特徴的な女性で、二十歳を越えて間もないといった歳に見える。アメリカ人女性としたはやや小柄な体格で、よくティーンの学生に間違えられる。

「本来はこっちが正しい使い方ですよ。まあ、今のISの主流が兵器だつてことに異論は在りませんけど」

それに返すのはベンチに座って雑誌に目を通してしているミランダ。彼女の視線の方向を示すバイザー上の光点が - になって気だるげな雰囲気をかもし出している。

二人のいる場所はケネディ宇宙センター、スタッフ用の控え室である。

この日、ミランダの所属する国際宇宙開発機構は新たなミッシヨンの為、通算三度目のIS打ち上げを行う事になっている。そのメンバーに機構の専用機持ちであるミランダが含まれているのは当然だろう。

NASAの力を借りての打ち上げである以上失敗した場合、その原因如何ではアメリカの面子にも多少の影響を与えることになる。そのため、万が一IS目的のテロを警戒して送られてきたIS部隊。ミナはその一員だった。世界で唯一ISを宇宙開発に使っている連中がどんな奴らなのか、興味を覚えたミナがシフトがオフの時間でスタッフを訪問してきたのである。

「そんなの建前ですら誰も言わないよ」

そんなミナが口にしたことにミランダはムツとしたが、反論は

しなかった。事実、ISは建前上スポーツであり、ISが宇宙開発用のマルチフォームスーツとして生み出されたという事実はほぼ風化していると言っている。

だから今は何を言っても意味がない。自分たちが行動で道を創るしかないのだ。言葉だけでは薄っぺらく聞こえてしまうのは実績がないから、少なくとも世間に認められる実績が。

「まあ、いいけどね」

ミランダは不貞腐れて雑誌に目を戻す。そんな様子を見て虐めすぎたかと苦笑いを浮かべた。

『IS用ロケットの最終調整を始めます。国際宇宙開発機構所属IS操縦者は発射場にて調整に参加してください』

丁度いいタイミングでのアナウンス。気分を害していたミランダはいい口実を得たと、挨拶も程ほどにその場を後にした。謝罪の機会を失ったミナは肩を竦めるしかなかった。

ケネディ宇宙センターのロケット打ち上げ場。聳え立つ、巨大

なロケットを宇宙に飛ばすための発射台、の横にあるロケットのミニチュアっぽいものが二つ。

「やっぱり見た目が締まらないなあ」

仰向けに近い体制で、『バロール』を展開しているミランダは呟いた。十メートルに満たないロケットの先に接続される形になっているその姿は、端から見ると割りと不恰好である。

一応ロケット固定用の設備でロックされているが、打ち上げ前のロケットが持つ特有の威厳のようなものは微塵も感じられない。

「本当はこれがなくても宇宙に飛び出せちまうんだ。貧乏な機構がわざわざロケットを準備してくれるだけでも有難いと思いな」

応えたのはすぐ横に付けられた足場でコンソールを弄り続けている南米系の黒人男性だった。

「でも初めての時のロケットはもっと大きかったですよね、ダニー」

「一足で月にいく為のモンだろありや。衛星軌道まで行くのにオーバースペック過ぎんだよ」

ダニーと呼ばれた白衣の黒人男性。本名はダニエル・アンダーソン。

二メートル程も有ろうかという大男であり、スキンヘッドと強面も相まってマフィアのボディーガードのような印象を受ける。尤もそんな見た目の彼だが、プライベートでは小学生の娘を持つ一児の父であり、一途な愛妻家でもある。

そんな外見の男だが、これでもIS用に使われているロケットと、その接続機の基礎設計を行った人物である。

「元々、こんなモンなくてもISは宇宙に出れるんだ。操縦者への負担を考慮しなけりやな」

彼の言う通り、元々ISは事理意で宇宙に上がる事は出きる。だが、その場合掛かる時間などの要因で操縦者の体力と集中力を削いでしまう。

「衛星軌道に乗るだけならこのサイズで充分なんだよ。資材や燃料も節約できるからな。代わりに試作とラインの変更に金が掛かった訳だけだよ」

何処もかしこも試行錯誤だ、と苦笑いを浮かべるダニエル。事実として、機構の計画は端から見て急ぎすぎている面がある。本来ならもっと時間を掛け、様々な技術を熟成させていく必要がある。

だがそうするだけの時間が機構には残されていないのである。色々
と不安要素の多い中でやっていくしかないのがこの組織の現状でも
あった。

「よし、こんなもんか。ミランダ、バロールの方からシステム
チェックを頼む」

「了解です。システムチェック、開始。……ダニー、三番サブ
ロケットに異常、バロールが認識できていません」

ロケットと、接続関連の機材のシステムチェックをバロールで
行う。ISCOAの凄まじい情報処理速度で問題を洗い出す。現代の
最新技術をあらゆる方面でぶっちぎっているISCOAは情報処理能
力でも理不尽の領域にあった。

「三番？あいよ。こちらダニエルだ。第三ロケットに不備有り
だ。第四班にチェックさせろ！」

通信機越しに他の作業班に指示を出すダニエル。ミランダは空
に顔を向けながら彼に問いかける。

「あの、ダニー。ダニーは僕たちのプロジェクト、上手く行く
と思います？」

「あ？どうしたいきなり？」

突然の問いを怪訝に思うダニエル。彼はミランダと顔を合わせる機会が多いという訳ではないが、こんな質問をされたのは初めてだった。

「ほら、僕たちも今は色々と良くない状況ですし。いえ、すみません、変な事聞きました」

ふと漏らしたその言葉は弱音なのかも知れない。『プロジェクト・ジャーニー』。機構の現場スタッフにはこのプロジェクトが停止する方針だという事は伝えられていないので、まだこのプロジェクトを最終目標と考えている。

尤も現場にとってプロジェクトの名前などはどうでもいいことであり、内容が変更されようがかまわないと考えるだろう。結果として人類の宇宙進出に貢献できるならそれで良い、と。そう考える事ができる人間が多く残っているというのも、今の機構の一側面なのである。

「変な事かよ。自分のやってることに不安になるって事は、そんだけ真剣だつてことだろ。ま、周りに期待され続けてりゃ、偶には変な事言いたくなる気分になるんじゃないか？」

ナーバスになっているのかも知れない、とダニエルは考えた。無理もないのだろう。ミランダはまだ十五の子供なのだ。この年頃の女の子の事は彼には分からないが、彼女の身に掛かる期待の大きさが、尋常なものではないという事は分かる。

「ま、いいけどよ。偶に変な事言うくらいで丁度いいんじゃないか？人ってな」

どんな声を掛けるのが政界なのか分からず、取り敢えずそんなことを言ってみた。相手が子供じゃなかったら酒に誘って愚痴でも聞いてやるくらいはできるんだが、と心中呟きながら。

「そんなものですか？」

「そんなもんだ」

素っ気無い言葉かも知れないが、ダニエルはそう返した。正解らしい返答が分からず、それでも何も言わない訳にはいかないだろうとも。

その答えの意味を考えているのか、それきり黙りこむミランダ。その顔は空に向けられているが、実際は何処に注意を向けているのかは端には判断はつかなかった。

「ロシア、ボストチヌイ宇宙基地より入電。ロケット打ち上げ成功、現状は順調に高度を上げているとの事」

ケネディ宇宙センターの管制室にて響くオペレーターからの報告。

「了解した、ミランダたちの打ち上げは予定通りに」

指示を出したのは菊李である。

「了解。ミランダ、ニア予定通り1120に順次打ち上げ予定。時間まで55秒。間もなくカウントダウンに入ります」

帰ってくるオペレーターの声に黙って頷く。菊李は今回のミッションの責任者の立場にあったが、どちらかと言えばお飾りに近い。この後発動されるであろう、『プロジェクト・モビリティ』の総指揮に就けるための点数稼ぎの意味合いが強い。

そんな政治的な思惑とは別に、このミッションも今後の計画に

とって大事なものである。

ロシアから打ち上げられる無人ロケットで宇宙まで上げられる、宇宙ステーションの人口重力型居住モジュールの運搬、本体との接続である。現在も別に居住用区画を収めたモジュールは存在するが、数年単位という長期間の宇宙航海には重力が欠かせないものと考えられている。

「カウントダウン、始まります。……10……9……」

カウントダウンが始まり、管制室の視線は一斉に正面の巨大モニターに注がれる。

近づく打ち上げの瞬間。まずはミランダのロケットが打ち上げられ、その影響がなくなる頃にエニアが打ち上げられる手筈となっている。

そして打ち上げの瞬間、画面へとミランダのサムズアップのジェスチャーが投げかけられた。

「3……2……1……」

そしてロケットを固定していたロックが外され展開。接続されたロケットが炎を吹き出し、『バロール』が宙へと打ち上げられていく。

「バロール順調に上昇中、映像ブラックウイドーに切り替えます」

バロールが完全にドロップアウトした基地内のカメラから、護衛のためもあり、周囲に展開されているIS部隊からの映像に切り替わる。

米軍主力IS、ブラックウイドー？から送られてくる映像は音の壁を突破する『バロール』の様子が映し出される。

「間もなく補助ロケット、切り離します」

画面の中、『バロール』は空を切り裂き続けていく。

大気を切り裂き、やがて音を置き去りに。雲を突き抜け、大地を忘れ。

重力を振り払い昇る中で、少女は激しき静寂に抱かれる。風を飛び越えていく中で、少女は不変刹那の悠久を焼き付ける。

音速の壁を飛び越えた向こうは静かだった。地上の静寂と違い、

寂しさも、焦燥も感じない。

遙か天空から見渡す世界は不変だった。凄まじいまでの速度で動いている筈なのに動きを感じぬ景色に、世界の広大さを見出す。

地球が自分を送り出してくれている。

不安も迷いも忘れていた。只々、この晴々とした胸中を謳い出したい衝動に駆られた。

やがて少しずつ、垂直の上昇が傾きだしていく。少しずつ、少しずつ。仰向いていく姿勢、蒼天が足元に迫ってくる。

そして青天がその青さを深めていく。蒼から藍へ、藍から紺へ。それは星の瞬きを交え、黒へと近付いていく。

『メインロケット、接続ユニット、間もなく切り離します』

地上からの通信、それがミランダを現実に取り戻す。

「ミランダ・ウルバーニ、了解。スタンバイ、OK」

間もなく、ロケットは接続ユニットごと切り離される。そして噴出される、『バロール』自信のバーニア。

ロケットには推力で劣るが、『バロール』のいる位置は既に引

力の坩堝の端。『バロール』自身の推力で充分迅速な飛行が行える位置だった。

大気圏を飛び越え、衛星軌道に乗る。

「こちらミランダ、衛星軌道へ到達。予定通りエニア機と合流まで待機します」

360度の全方位を網羅するハイパーセンサーの視界。頭上には青と緑の母星が輝き、足元には無数の星光瞬く虚空が広がる。

合わせて三度目の宇宙。人類が何れ新たな天地を求めて旅することになるであろう、漆黒の大海。自分が最も人の役に立てる場所。

ミランダ・ウルバーニという人間が、本当の意味で必要とされる場所。

生まれついて背負ったハンデ故に、ただ他人の負担にしかかなり得なかった自分を忘れることが出来る場所。

自身という存在に対し、最も充足を得られる場所。

やがて第一宇宙速度を維持し、衛星軌道上に制止している『バロール』の視認範囲に、エニアの纏う『隕鉄』が映る。

打ち上げの勢いのまま、上下間逆の状態である『バロール』と違い、『隕鉄』は脚を地球に向けている。足元に地面がないのが不安なのかも知れない。

「エニア機を視認、間もなく合流。その後コンテナとのランデブーポイントに移動します」

『隕鉄』が『バロール』との距離が近くなる頃、ミランダはバーニアを吹かす。それに付いていくためにエニアもバーニアの出力を上げる。

星の上を、二つの彗星が駆ける。

第九話（後書き）

早朝出社時に半袖でいるのが辛くなってきた今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか？どうも、郭堯です。

今回は久しぶりにミランダがメインになった回です。主人公の筈なのに久しぶりつてのもあれですが。

今回は久しぶりの宇宙回になった訳ですが、ロケットの打ち上げってこんな感じでよかったのでしょうか？作者のにわか知識だと余り分からなかったのも。もし致命的な間違いがあれば指摘していただけると嬉しいです。場合によっては修正もありえます。

そして全くの余談ですが、最近眼鏡を買い替える機会があり、イタリアのブランドに見えました。

それでは今回はこの辺で、また次回お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3098u/>

IS 星海と共に

2011年10月9日12時24分発行